自娛毫錄

十

昭和七年第十月上浣起筆

特別
イ4
1919
446

176711

自嘆老拙

昭和七年十月初旬起筆

○畫公一六の雲根を画賦全紙に畫し給ふを
拜するものなく余大悔を感ず又石を畫し
給ふものを愛せず試みに床に掲げて觀ず其こ
壯觀也一六画に於ても敢て拙なるを恥ず余一六と
無為なる書畫を聖に掲くるを喜ばず
唯此此の巨幅に筆を公に指動く、畫石奇板
なるの足るを知る、是流亦奇し可也、云々

昭和十二年元旦 退翁相之後試筆之 [印]
於喻西仙館 南軒上以表奉祝

石濤和尚筆　春景山水

羅振玉氏藏

石濤は字にして、又清湖老人、大滌子、苦瓜和尚、嗜章者と稱す、本名は釋道濟、明の楚藩の後裔清初文人畫の泰斗たり。

38- 9232

聖天子萬壽元旦

之意下以自慶一家頌健也是日天氣晴和

風不吟條使人有遐々登春喜之想

巖谷修口口

是巖谷一之一代の珍帳とする也可き、如斯のもの

を始めて書室の用とするを得て

○ゆうの故人とゆうれハ木兩立い米沢の人で覚代橋を

第しれのて知れてゐるが、此人ハ狂歌をよくし此のて

人に頼まれて時々頒じた。此の頒紙の前半ハ五穀糧

とゝふ菓子に五穀を詠み込んで菓子屋と共つくれ

ととを書いて壁に掛け端午の節句に菓

子を客の也来れのをもてなすと、是が五穀糧であつた

横原製

味ひ深く

菓子むきなるか

末寿ハ木柳雪

木柳雪

聖天子萬壽元旦

を意下以自慶一家親健也是日天氣雲霧和

風不吟條使人有懸々登春喜之想

嵐谷修口口

是ん岩谷二六一代の珍帳とゝ始めて書う書室の用とするを得て

○ゆうの故人とゝゆうれ八木用立い米沢の人で蒐代格を

第しれので知れて居るが此人は狂歌をゝゝゝ此ので

人ゝ頼まれと時々頂いた此の旅行の前半ゝ五穀糧

とゝゝ萬子ゝ五穀を頂みこんで米ゝ屋と共つくれ

石穀糧

まめやすあり米

ゝをゝいゝの菓て

味ひ所はく

米をむき粉よれ

米寿八木柳雪

米寿雪

北菓子は上種菓子の雅び味が濃つて可
うの菓子である。産地は行方。
○昔の築城を研究した人が北條氏康と出てゐるの
を見ると、中古、兵城の時の用意の一二が出かんをゐるこそ
れは内濠うち、田螺を養つた、養つた、海台や西洋ものを
養つたりすることは勿論、壁を穀類を塗りこめたり
蓮根の通路を植ゑ殺す枝をたくさん地下深く
植へたりもしたとあつた。何等りも大切なのは水である
つて、築城の地を選ぶ、先づ住民が堀つを得らるか
否やを考へつれと云ふは右もあるべきである。附近の川などの
から水を引き入れることは法くしくあるけれども、交
戦となると、断水さうして雲んかある、天龍川を引き

標原製

入れた二股城は、敵を欺く策が採られて断水の
為めに義城は実例である。多くの軍用金を貯く
ることとなるとは言ふまでもなく、某の城内にも鉄道を
黄金が埋めてあつたと云ふを聞く。
七ツ屋塞とか言ふ花城の実例は
城内にも多数の金物を得らるいことも多いのだ、
例のカタパンが軍用を出来たのであらう。
○蟲のことを於紙本中にあんして巻の句を志
らべて見ると、いろ〳〵ある、巻いた中にも人氣あり
る。他の花の持ちあ弱ハしい花りをもつておる、花
が池の上を花人等、笹葉の中を傳つたりすると活潑
の氣が漲る、形が少さく優しく人るごと欣帳の外へ

死人で居る、彼が云いだけに哀れさが深い。昔一から菅狩が優美なる姿（びとうつくしき女のお）嫁である。のみならず、祝言（まじもさハぐ）一茶の此ことを深しく、と親からさわし菅うるを云ふてみる菅が死ぶとあちこちもこのちからも菅こい呼ぶ、一茶は此句茶を歌ふて、あちこちの蛙がまごつく菅の「とぶ菅あんといたんも猫こうる」とあるの、菅が死んで来る無三菅まる人かるいとかつてあるのび、皆る菅の人氣を深しとものである。一茶は深れい菅るも田植がありて、たつ菅都の空はきとるの命」と云ひ聽かせ、死の菅めの姿をつるこんな」と注意を與へ、戸迷ひの菅の戸内を閉じとめられるまでも氣をおろすまで出よ菅」と呼んでみる。可憐の菅と此の情味ある句茶がみるのは自然の配剤と云ふべきか。

○古文書并に金石類に用ゐる印二顆成る、

稱獻日年心

朱材刻三年蔭心

○菅のやうな人氣はないが、夏時池ある家に涼しう佇るお客は蛙である。其の形貌が醜はしいけれども、其聲が美しもるいが、多の愛嬌がある

のである。他人と好かん、其の姿態がさすがに出さえ
てゐる。左に二三の句を挙げる

藻かりに浮世をのがれ住こうか

其影をやうて飽れる初蛙

つぎ接の衣の顔を見る蛙

なるべく死心を持て蛙かな

未かゝりて一分別の蛙かな

西のやうな咲つて時蛙

其影で一つ踊れよ時く蛙

既に書き上げた「花と詩」と題する一篇に蛙を添へて
なほ書いたのがこれである

○自分へ劇壇のまことに自分に関係する

横原製

四劇向上会から表彰された義御殿の改良劇界功者
若葉を接ぐことに始めて此のことが一二を上げるまで。
川尻寶岑の事のおきいまで一で居る。北人の代々故郷甲斐
で、黙阿弥の門に入つたことまでは知いが、国士の頭角の
大の芝居好び、自分の家が此地に居る日でまだ観劇
に出ることは住る好き者であつたのだ。自分も好きから御
を書くことのみ、それがうまく舞台とハマツて秋一郎
猛や国士の推奨で、それいろの心が上演されるもの
なる北人の心の上演されるのハ少くまれ、伝田学識心と云ハ
れるものも実に北人の執筆である。志村海風氏と
云ハれ、あの天覧を供した小柳公も北人の心長田秋
涛氏と共に表彰された菊香会の会員北人の心も他も北人

の名を後に出したものがいくらかある、主に執筆、聊かの見識をもつ二十数種あるのを見た。北人の芸術の一例として剣道に立ち入ってみたい。北人の芸術は剣道、剣術の中に其の一を挙げて休まもを仕合と言ひ伝へあつた。ある時国主の振り回いしに薙刀の切つ先さが息子の額に振れて傷を受けたとかあるが、その人を名人の資格と考へつゝあるとある。資格の域に達したと云ふのである。

○福地桜痴が書国の赤穂が有ひもをへん、庭つきの仕者さうつたのの作る美義びもある。必竟器用で文筆の才があつたのと政治家的能力があつた故であらう。自人の

複原製

の始めを知つたことは桜痴が二人の引人をゆしたことが見一人の今の国本稿書び、他の一人は横本稿書びである。国本は早く出を出つて剣術の由来を述べ、ずは昔のことが、横本は横痴を敬ひ仕者とうて、十年ばかりの間に多くの脚色を書いた。北人の大正元年十一月廿七日死人となが、彼の生涯は難しかつた、若し柿右衛門が最も北人の作品を高かい、その原形を見ることが出の桜痴に酷似したものであることを希望した。桜痴は近松化の時代物を推奨し、本脚色会作の若様を破り到来の奮発をいくらか成した。伝四郎国に愛けする仕者のことが、桜痴が死ん海は一向書国に愛けする仕者のことが、桜痴が死ん前七二代のはなき様あまり低つたのは、今後ならも偉いと

云へ移ったのである。

○明治以後の制度は高利貸の一つなる任屋家の守田勘弥であった。勘弥は通称江戸三座の一つなる守田座の十二代目の座主であるが、義太夫がすかったが人を操縦する黒幕と任屋の手腕かすぐれて座主をそそのかし、国十郎菊五郎は名優と称せられ、あの芸を操縦して明治の劇壇を盛んならしめの勘弥であった。芸人は三座と云へば中村座市村座守田座の三座であり、天保の改革で浅草猿若町へ永住と事が極まるまでは、芸人の中心を移して新宿座を建てた勘弥である。此の座への建築の意匠を凝らして四式を一新した

東京製

で日本一の模範劇場と云はれる浅草市村座へ村山座と改称した大改から中村宗十郎を峰人化のを妨害の為に一千円を要して阻止した勘弥であった。それへ神奈川由って彼の勘弥は手を引いたけれども、横浜を制して宗十郎潜意の出し抜きを新宿の新吉やのとので村山座の桟を内かしたる競争で明治八年から三十年間の長俵が出来守田座は株式組織とする性名を新宿座と改め勘弥の座主の名義を失ったけれども実権は役員の名義を失ったが、すくなくも後、新宿は生へ数焼羅ったが、芸界本名の萩井十兵衛を名乗って黒幕を

やつとみれば、中村家十郎を招く為め勘弥自から出でつて
宗十郎を承諾させたが、西南戦争すんでなのちの芝
居は失敗に帰したが、写真師として劇を演じたの
が大当りで、十一年を終り三流を復
興した。その後無関係に歌舞伎と分れて歌舞伎
四の借金が五万、勘弥の手腕上隠退したが、廿二年
の木挽町に歌舞伎座が出来ることゝなつて大敵があ
らわれたので、先づ第一に中村宗十郎を自己の
市の四座組織を形つくり若優全部を自己有し
たので、歌舞伎座も出来ても優の無いので
窮した。

勘弥の次ぎの任者家の田村成義である。これも

榛原製

と共に後世に市村座の白厳洞弟護士があつたのが
終に疎脱を揮つて田村将軍と許名された。もと
法律の心得があるから、俗説を解くことゝなり
上手であつた。行商産が株式組織のうつたのから
国十郎の借金を整理し
ようとの大改革を行遂び国十郎の為く壮士が押し
流めた。後に市村座の座主となつた。全く
梨園の人とは異つた。大谷友右衛門の松竹合社
と非凡な二人の先輩が任者を中心の京東の
劇場は実人と此等二流に観かあるが劇
の任者家は政治家の手腕を要するものである

うく廣大のやり得るものである

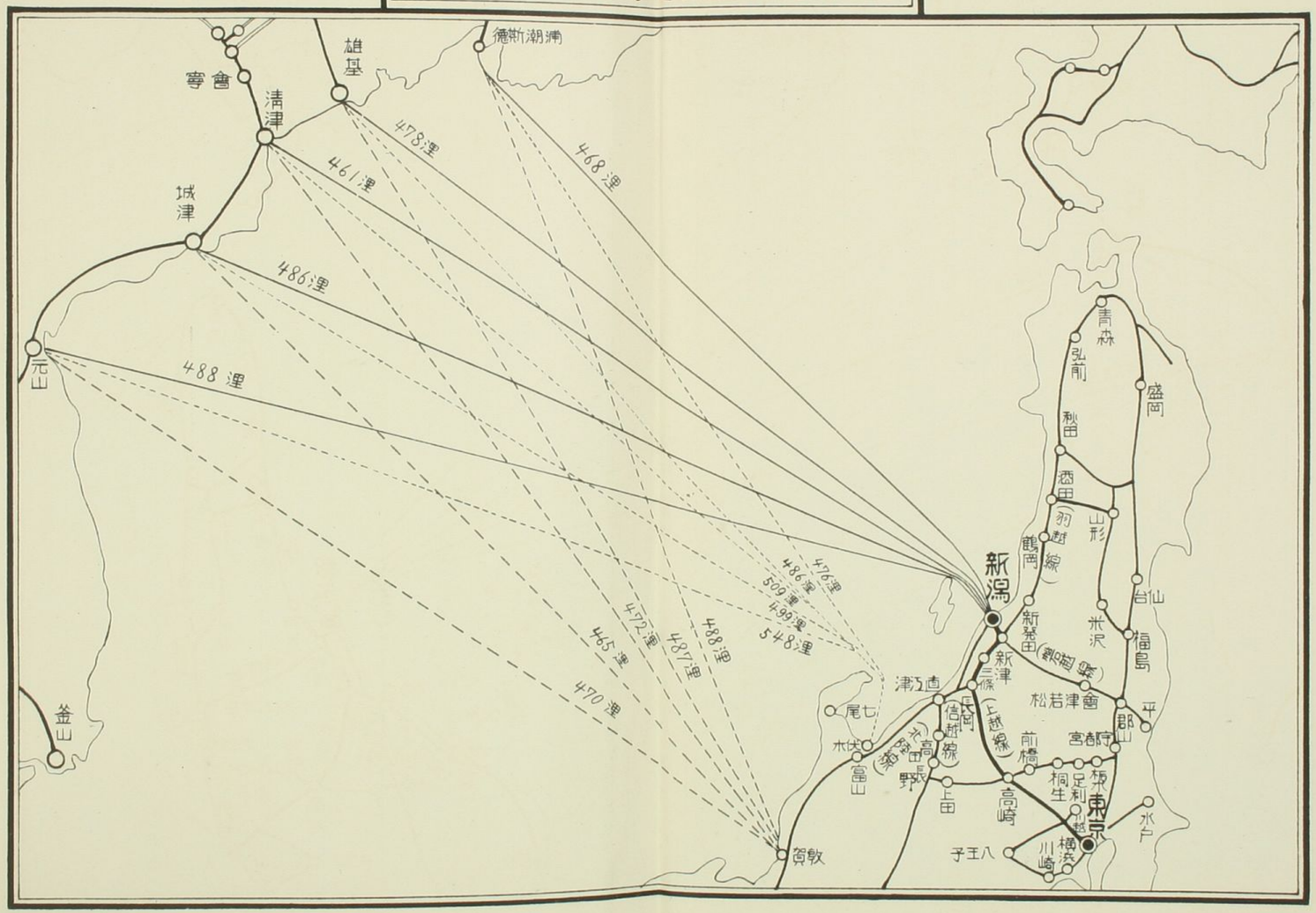
○満洲と欧洲家が興つたのは日本との海戦（日露戦争）の結果である。欧洲港の雄基清津となる最も近い港である。欧洲を基礎とする分譲さる、ものであらうと推へられる。敦賀伏木を函館港が定しかことは勢ひ欧洲ひいては市長を始め相談も出来ず、事業の有力者を今年も回る事があつた。全体欧洲の港は久しく話判がつく伏木の方がよいとされた時があつたが、それは過去のもので、御後援の仕度の分の工事も成り、分着で港の水深を増す計画は進めつゝあり、現在と雖も伏木と比しても敢て遜色がないと云ふ。数年

上海航路こう開通した事実との間の時間が著しく短縮した事満洲の物産を使とするゆゑ

を経れば工事の結果優ることゝなるのは知れたことだ。況して河港の水面積の広さは伏木と比較にならぬ。而して桟橋岸壁等は伏欧洲港の水深は此上も増加する。連絡も伏木と比較にならぬ。多くの聯絡線が輪奏して居る。而して桟橋の新築の伏木と敦賀とは陸海軍の輸送に就ても多くの重要職務の関係から欧洲港は安全なる便利と、航路をこれまで便利として満洲の制解も敦賀と敦賀は何れ伏木と同様に欧洲と交通をし伏木を元らんとするは何れであるか、商務の大使吹雪が市山出発で為の偏頗の動機も云ふも恐らく非政

の新かるいとあらうと思はれる、滿洲と内地連絡も
國家的に大なる關係を永久に存するものであるから
ハ勢ひ多情實の存するものと大計を誤つてはいけない。軍
事上に産業上に紀模の大を要するい言ふまで
もなく、左に卷末のものを注意を掲げる、
○十月一日は大東亞延生の日として永く記念さるべき日だ、
○今迄郡部と市部とに分つて郡部は五郡
八十餘ヶ村が東京市と併合した地域は今まで
七倍大きくなつた人口は二百七十萬百萬となつた。世界の第二三位迄を大都市とな
つたと謂つてもよい大膨脹である自合でもがかれても
東京と共に未だ時は今から五十年の昔しだ

新潟港利用地域


會寧
清津
雄基
港斯湖湖
城津
元山
釜山
敦賀
富山
七尾
木津
直江津
長岡
上田
高崎
前橋
桐生
足利
佐野
宮都守
郡山
平
福島
台山
米沢
山形
酒田
秋田
盛岡
弘前
青森
鶴岡
新潟
新発田
新津
三條
松若津會
水戸
東京
横浜
川崎
八王子
(上越線)
(信越線)
(羽越線)
(奥羽線)
(東北線)
(常磐線)
478浬
468浬
461浬
486浬
488浬
476浬
486浬
509浬
499浬
548浬
472浬
487浬
488浬
465浬
470浬

昭和三年	一、四五〇、〇〇〇噸	一、四七〇、〇〇〇噸
仝 四年	一、四六〇、〇〇〇噸	一、四一三、〇〇〇噸
仝 五年	一、六二〇、〇〇〇噸	一、三七〇、〇〇〇噸

二、出入貨物

年次	新潟	伏木
昭和三年	一、一五五、〇〇〇噸 五八、〇二〇、〇〇〇圓	一、二四〇、〇〇〇噸 八四、〇〇〇、〇〇〇圓
仝 四年	一、一七〇、〇〇〇噸 六〇、二〇〇、〇〇〇圓	一、二五四、〇〇〇噸 七八、〇〇〇、〇〇〇圓
仝 五年	九九二、〇〇〇噸 五一、三〇〇、〇〇〇圓	九八七、三〇〇噸 五五、四〇〇、〇〇〇圓
仝 六年	一、〇三八、〇〇〇噸 四六、七〇〇、〇〇〇圓	九一七、四〇〇噸 三九、六〇〇、〇〇〇圓

三、朝鮮、支那、滿洲トノ貿易額（昭和六年中）

樣原製

(イ)

新潟港

新潟、伏木兩港水深比較

1. 防波提燈臺ヨリ河港上流ヘ川筋

長サ 五百間　巾 六十間乃至七十間　水深 二十四尺乃至二十五尺

2. 臨港會社埠頭地域

五萬五千坪　水深二十尺

3. 臨港會社前水面ヨリ上流ヘ縣埠頭地域迄水深十八尺乃至二十三尺

尙ホ臨港會社埠頭地域ヲ除ク1.3.ノ川筋及埠頭地域ハ去ル臨時議會ニ於テ之ガ浚渫八十一萬圓計劃ノ二分ノ一國庫補助通過シタルヲ以テ全部二十五尺水深ト可爲目下進行中ナリ

新潟、伏木両港設備比較

(イ) 河港水面積

新潟　六〇〇、〇〇〇坪
伏木　一九三、五〇〇坪

(ロ) 棧橋、岸壁及荷揚場

新潟 ┬ 棧橋 一一二間 ┐
　　 ├ 岸壁 八四二間 ├ 計 二二一〇四間
　　 └ 荷揚場 一、二五〇間 ┘
伏木 ┬ 棧橋 一二七間 ┐
　　 ├ 岸壁 四五一間 ├ 計 一、二一五五間
　　 └ 荷揚場 六七七間 ┘

(ハ) 後方聯絡鐵道ト海路

新潟 ┬ 信越、北陸線……大阪へ直通
　　 ├ 信越、中央線……名古屋へ直通
　　 ├ 信越線……東京へ直通
　　 ├ 上越線……東京へ直通
　　 ├ 磐越線……東京へ直通
　　 └ 羽越線……青森へ直通

伏木 ── 北陸線 ── 大阪 ── 東京
　　 ── 青森

尚新潟港ハ内地諸港中北鮮ノ清津雄基等ノ諸港ト最短距離ニ在リ

(ニ) 倉庫及上屋面積

新潟　二六、八一五坪
伏木　二三、七五八坪

(ホ) 荷役能率

荷潟（現在工事中ノ西護岸整理及第二期擴張計劃後ノ能力ヲ含マス）
　岸壁、棧橋、荷揚場　一、五四七、〇〇〇噸
　川荷役　一、二〇〇、〇〇〇噸
　計　二、七四七、〇〇〇噸

伏木（計劃工事完成後伏木港務所出版物ニ依ル）
　岸壁、棧橋、荷揚場　一、四一九、〇〇〇噸
　川荷役　一二三、〇〇〇噸
　計　一、五四二、〇〇〇噸

新潟、伏木両港船貨比較

一、入港汽船噸數

年次	新潟	伏木
昭和三年	一、三七〇、〇〇〇噸	一、三八六、〇〇〇噸
仝 四年	一、四五〇、〇〇〇噸	一、四七〇、〇〇〇噸
仝 五年	一、四六〇、〇〇〇噸	一、四一三、〇〇〇噸
仝 六年	一、六二〇、〇〇〇噸	一、三七〇、〇〇〇噸

二、出入貨物

年次	新潟	伏木
昭和三年	一、一五五、〇〇〇噸 五八、〇二〇、〇〇〇圓	一、二四〇、〇〇〇噸 八四、〇〇〇、〇〇〇圓
仝 四年	一、一七〇、〇〇〇噸 六〇、二〇〇、〇〇〇圓	一、二五四、〇〇〇噸 七八、〇〇〇、〇〇〇圓
仝 五年	九九二、〇〇〇噸 五一、三〇〇、〇〇〇圓	九八七、三〇〇噸 五五、四〇〇、〇〇〇圓
仝 六年	一、〇三八、〇〇〇噸 四六、七〇〇、〇〇〇圓	九一七、四〇〇噸 三九、六〇〇、〇〇〇圓

三、朝鮮、支那、滿洲トノ貿易額（昭和六年中）

	新潟	伏木
朝鮮	五一、二九一噸	四五、〇七二噸
滿洲（支那及浦港ヲ含ム）	一、二八、三四一噸	七七、四七〇噸

四、木材貿易額（昭和六年中）

	新潟	伏木
米材	二〇、五〇〇噸	二九、六五〇噸
沿海洲材（北樺太ヲ含ム）	一八、六七〇噸	三〇、〇〇〇噸
北海道其他	一二、三二〇噸	一〇二、六六三噸
計	一六二、四九〇噸	一六二、三一三噸

五、肥料貿易額（大豆粕）（昭和六年中）

新潟　八八、八九〇噸
伏木　二二、四五〇噸

(ロ)

伏木港

1. 防波提燈臺ヨリ河港上流ヘ川筋

長サ　二百間　巾　十一間乃至二十七間　水深二十四尺乃至二十五尺

2. 更ニ右上流川筋

長サ　五十間　巾　二十三間乃至六十間　水深二十二尺乃至二十三尺五寸

3. 更ニ其ノ上流川筋

長サ　二百間　巾五十間　水深　二十二尺

萬位であつたらうが、五十年間即ち世紀間の膨張は実に大なるものがある。今から十年前に大震火災で高岡全市が焦土と化したが、まだ復興されない

榛原製

みが、こゝは都部を保全しても大都市と見なすべきである。之れを大田道灌が首都を築くべき現象である。之れを大田道灌が首都を築いた時、後に徳川家康がこゝに江戸の覇府を開いた時と較べて見たら、数段の発展を認めるであらう。自分等は長寿を保つて甲州文化の発展を見ることを得たいものだ。斯の膨張に新しい生命の将来に就ては私達の考えを得たい。全体移り住む人口の都会地に吸収されるのは各地から中央に人の移り来る為めである。地方のことを思へば、都会の偏重を憂く故に複雑なる行政のさばき方をも、一都市の範囲に行政を操ることは便利を統一して、

る和馬とする、新旧の匠を漸次改革することも出来るのは言までもなくであるが、斯る大都市を統治し、ひく
ことは決して容易なる事業ではない。果して市長其人に、それだけの能力があるであろうか、今と雖も市会議員の横暴
腐敗に困り抜いて居るのに、更に第十の議員が
増加して、大きな市会となる、それが果して大東京
を善導する機関となり得べき歟、横暴腐敗が更
に深刻となることは疑ひあるまいか、こんなことを考へ
及ぶと一概に大都会となることとても陶然たるべきも
ならずやうの思ひ、
○世界の大戦以前のデモクラシーは世界を風靡した政体
であるが、今は弱る不評判のものとなりきれり、事実を

榛原製

の裏に伏くるいうて、それで続けれども国のこびることが目前
に見えるので、フアッシヨもちろん政治の仕方が消滅から
んを来した。フアッシヨは新らしい主義であるが、古くから或る形を行はれしめる。それへ後で書くことにしても
先づデモクラシーの缺点を云ふと、此の政治は多数
政治で多数の支配するものであつて、目的が極めてもみすぼらしい
ものである。世界の大戦で多数の労働者が働いた関係
から、戦後の膨張を生じたのである。それ故に危険がこゝ
政党にも労働者の国体に媚び、成り立ち得ない
のである。労働党が大いに躍進し、英国利のぬきし
国柄にも、労働者の我儘を充たすに充れば、実権を奪

無産者が出来て国は貧人と富人とに分るるものなり。伊太利も同様で、毎年十数億と云う鉄換が入つて之れも二国の激しい。働きもしない労働者は相当な食費を支給するやうなことをしれば迚も国は立ち行くことのない。そこで必要に迫られて英吉利の労働者の首飼で クドナルドハ室を離れた時間の収拾の方つけこそ兵力を籍るまでもなく青い。伊太利の ムッソリニーが現はれて、之れも兵力を用ひて時間を収拾した。猶ほこの他のヒットラーの政権が帰するであらう。ある史論家のヒットラーの政治を非難する芸等は皆なデモクラシーの反動で、多数政治を非難とした政治である。人間の幸福は最大多数の幸福など

と千古不変の原理のやうに云はれたが、実は必ずしも真理でなく、多数の幸福であるからと云て労働者の為に偏したことをしたら国は亡滅に瀕した。実のデモクラシーの欠陥の大なるものは前にも云ふことく政治困難なることが無いことである。どうしても仕方無ければ、政治は全く無意味である、国家の為めに犠牲を払はなければならぬと云ふが、ファシヨの主張であつて、国家の為めに資本家はプロレタリヤでも勝手を云はさるべしと云ふが、ファシヨの主義である。こんな言を換へて云へば国と云ふことは即ち資本家であるから国が紊乱する時は必ず英雄が起つて、日本は

云へば平安朝の公卿達が支配思想に心酔して統治が出来ず白書盗賊が横行し、武力ある豪族は起つて之れを退治し、頼朝が覇府を開いたのも或る意味のファッショである。ファッショは或る意味の事実政治であるが、保し国民の支持の上の立つの専制政治であることを忘れてはならぬ。立憲政治と云ふ立憲政治の出来ないうちは、立憲政治の鉄則を神ふことである。立憲政治は国民の代表を通じて国民の意思を代表せしめるものであるが、事実は国民の意思を代表しても振らず、そこで伊太利での国民党の親兵を以て大別し、以下の組合から代表を出すことのないうちは初めて国民の意思が代表されるとも云ひ得るのである。前世紀に於ては社会主義が義人も其の結果利己主義と流れ、大資本家の設庵跳梁して今日の如き害毒を社会に流しつゝある。これに対して国家は其の対抗を統制と称して抑制することが出来ず、公益の為めに資本家と抑制することが出来ず、これも光意国家本位から割出したの事で、愛国の為めと云へば資本家も犠牲を払ひ得べきものである。兎角無統制の多数政治の弊は既に主張せられ、今日之れを矯制する程度に於て自由を或る程度に限ることも亦止むを得

きいと云ふが　フアウレヨの主張である。

○頼山陽の十二月帖一帖を獲る。

蒙の為めに國家隆を考へしるしたるもの　文政七年冬作

二書畫日の梓に羅る所の山陽の墨帖を概観するに此帖初めて見る不良、荒き筆の色と

人へて晩年の如きものを見す、故の中人の偽造と

て者を作るあり、若未の跋文を之を猶物の大四

和尚の偽造にあらず　伊藤東涯の十二月帖の文を云

りて筆一字と異なる、其文左のごし

東涯翁自書仮賦一卷　有刻本

猶之大四和尚偽造　偽造　伊藤東涯文　作法帖

第一代鉅匠　元國　冊後　為河芳

引拳迄以見前半忠序之風英如其

書亦雅者可則和尚食也以示余仮也

何丸

癸酉子孟春　後学頼襄拜仮

□□

亡い晩年の如き風味を溯けしめる又校合の色の変

遷を見る一標をなすを得べし　十月五の記

○貝分が序を書いた篠の錦絵の幕末の浪女百話

の上巻が出版さんで一読したが江戸情緒が漲ってみて、

おもしろく読んだ　中に刺青をやつた女の実験談

がある、刺青の話しい話を少くの出始めている

から左の其の一部を抄出する、但し仮名を

複原製

系文に従り

牛込赤城に初代の彫宇之とゝかが刺青の名人とゝいわれ、今は二代目で其の妻も彫素柄刺をやつてゐる。実験をしたゝ人の彫つたのは背中は「鯉」「お魚」右の脇は「山蛭」左が「金太郎」と云ふ刺青を施すに一切二切と云て、一切は一寸四方で、それをくきつて彫ることゝなつてゐる。

彫る針は、メドの通り得針を幅三分長さ四寸位の竹に、木綿糸で結びつけたもので、筋彫が二側二十本、ぼかしが三十六本で、竹のしらやうなので彫る。筋彫ばりの時は紙で血を拭き取つては彫り、彫つては拭きとる。ぼかしは手拭を用ひるが墨と血とで真黒い手拭となる。朱を入れる時、血と朱とで赤い手拭となる。

彫る時はピチ〳〵音がする。痛むことは勿論だが、痛いところと左もないところあつて、ちょうどの脳天までビツンとする、音の刺青を痛ひ所は切つて痛ひ思ひをすることがある。

刺青に用ひる墨は上等でいからくろい、上等の墨は這入らないと云ひます。彫代は一切四十銭で、実験した人のは筋が二百五十切、ぼかしが六百切朱入が四十切、都合八百九十切、此から、四百四十五回日数百三十日、此間は休子のない日と

彫師のうるさい日があつて、熱が四十度位出ることもあつた

背中を彫る時はうつぶしてゐます、横腹の時は仰向いて足をのばして彫ります、皮膚を伸す為めです、曲り目がすむとやりまくる、疼もすると墨が腐ることがある、そうすると一ケ月位休まねばならん、墨の腐るのは変化

彫つて仕まうとかさぶたが四五回はがれる、美まひどく痒味を覚へて、蚤が千疋もおるやうで寝られない、着物をきてゐても蚤のからだをねすぶつてゐる人、蚤蝨を表へ出してもしまうとかゆい痒味が実に強くなる

榛原製

ないものです

昔は黒、朱、べにがら色の三種であつたのが、今は赤、紫、黄、葡萄の四色をつかひます、赤は内黄が出きて主になりまいと云ひます、赤は刺さるい、黄は蒸らくさいから、黄は蒸らくさいから面倒と云はれてゐる

の黄墨のほかしも、吉原の土地の彫金と

まが名人と云はれます

人間の體の熱は三ライまで針が義こ義しても

で冷さ抜はらうんやうまる。今は痛味を避け

る為に注射薬を墨こ和してますが、美

は病色のやることで江戸時代は排斥しますから

○一茶の句に

うかと来て我をかいしの替り哉

こんい実比を寄つれ句れ、畑の野菜や梨子枕元

の茶わ掛ゝ主寄つて拾ゐ比人をり

標原製

きとめて自分ハ用を為さずとこゝを離れてやう

ゐことが隠合男さんとある、斯う坊合が心ろそまも

かいしの役をつ[illegible]とめるのびある。隠合世間ゝハ

うかと来て山子の役をつとめるものがある。

何ゝ今の絶載ハ含れたゝ、云ふのが先ちする

とかがしゝである、ゝの人ハ此ゝ香殿とゝろてみる

ハけど、今のことハ人任かせで其人ハ何ゝ知

らない。誰んやらの句に「道ゝ茶くめ個の茶山を

もしゝで香殿とけのことハとかゝ茶への茶の茶山を

ゝ保しハの香殿が人をひきをつける、こんゝ伝つて人

の使用を除まるから、そこの茶山を今長ゝ役立

つのである。茶碗の句に心ゝ身ゝ役ある茶山

續古老雑話 七）鏡淵生

三献茶屋

學校町二　西山藤吉（七十二歳）

私の宅もこの邊の草分だが今の鏡淵新宅の所は舊三献亭のあつた跡で舊二月雪消え頃から京都謡曲に立つ人々眼から逢つてこゝに別盃を酌み交すことになつてゐた。

◇

昔から三軒連んで家があつて上は烏丸屋・下は堀鍋太郎・中が茶屋で中茶屋と呼んだが六十余年前に廢業してから武本藤兵衛の家だけが其家を合せて間口も廣く繁昌した。料理人を置いて料理もしたが其頃はまだ鳥瀬や行形屋、鍋茶屋などの名妓の出ぬ頃であつたからこの茶屋へ飲みにくる客は多かつた。毎日五・六組の見送りなどもあつて賑んであつたが俗に三文盃とも稱してゐた。

◇

間口も二十間からあつて今の松井藤治氏の所も其一部であつた。裏庭には池などもあり賑かに綱引

角田の三山を望み信濃川は清流として風光に富み中茶屋の裏土堤から先は幕時中瀧原藩であつたが藩扱ひ上不便なので私共相談の結果新潟區役所と藩役所とから立會の上學校町へ合したのである。

◇

亭の主人は俠氣ある人で何事も相談相手となつた。目明し池上の手下二十人同盟の格で威張つたものであつた。安政の頃寺門謡軒先生も門人と共に遊んだと見え三献亭と書かれた額が今もなほ遺つてゐる。

◇

こゝから距たる一丁ばかりで題目庵がある。仕置されるもの引廻しされるものもこの茶屋の前で中馬

一生の別れと名殘の酒を酌むことも許されてゐたが、家の中へは入れず戸口の邊を廻て、腰掛を据えそこに休ませたものであるがその時の盃や土瓶は不都のものとして打碎き土へ埋めたものである。

◇

鰻の淵源瀧場、月岡安照寺の僧は同僚から贈つた白の着物に白の丸帶を結びにした姿で一ぎわ目立つて送られて來て遊人とこゝに別盃を交したがあの藝妓でも多くは飲まず二日か三日であつたさうだ。この茶屋の本家も武本と稱し近所であつたが有名な竹内式部先生の遺蹟で一通の書簡が存されてあつた、それが式部先生の新潟出生の唯一の手がゝりとなつたので今は市役所に大切に保存されてゐると聞く。

◇

この武本は御山番の役目をしてその後は家具屋をしてゐたが、それから噴湯といふ場所に一軒あるばかりで關屋までの間に人家はなかつた。もつとも西町に山際・鎮野・梅川の三軒ぐらゐで題目庵の先からは野原であつた。

◇

（註）昔士人買醉、倒載三文錢去、因曰三文、酒肉之値可以考古也。今則妓楼客多就亭開雛遊因之云三献。一日予被藤山氏而游、亭主乞詩。賦此贈之。

羅紗錢盃三献亭。管弦一曲愕沙鷗。水光汪檻山光翠。知與行人挑別愁。（寺門謡軒）

子孫」は正さう之んを承けたのである。今方東京市へ編入とんだ舊都新都まは田畑も交つてゐて田舍そつくりの感がある。或る漫画家は新舊の都市の子とこの差異こんからの東山子は日蓮宗を着セルのは馬のおじいさんと京西田舍を實まとこの東京市と京西て都會人らしい洋服洋帽の東山子を吉いとなどは一すおもしろい。一茶の句にどこもく花いかいしはるこうけり」であるから、市とする東山子も一新を一変する。

十月六の記

○東北帝國大学国語研究室勤の田中教授著した粘菌研究が出版した一部

二冊を寄のせて来た。本書は胡餅菌と大和綴は區別を研究したものである。此著書の特色釘が大和綴にうつてある、書の中に胡餅菌の意味である。粘菌とこのは胡餅菌のことで、デツテ「と淡白所から、孢蝶とも言ふ者の色い称呼も自然生じた。大和綴も胡餅菌と類似の点があるのでやはりもしんが大和綴と胡餅菌と混同して、従来はツキリと大和綴の特長を現はしたこの、日乃ち大和綴と胡餅菌と実ある所を現はしたこの出来ない。しかも甚だ曖昧で混乱してゐる。全体胡餅菌は宋的の特色である。宋的は稀覯のこの

で容易に見ることが出来るのから、実物に触れるように為めに胡蝶装の本体が知れるように相違ない。併し胡蝶装は宋版だけでなく、日本にもずいぶん行はれた。その装法は糊心を中心として折り、その折つた所を糊で貼附するのであるから、裏の無字の所が両方に現はれる。善通の袋綴は釘で糊心の部を折つて、無字の裏を中にして両側の餘白を合はせて綴つるのだが、胡蝶装は四方の餘白をそつくり共使る法かして四辺ともに残る。こんなる四方の餘白を有する所以は字のある所を保護する用意から来たものである。数十枚を善通の

例に倣つて綴ると、バラくになるの此時の数乱れも糊はすると差千枚を失ふことも多いが、それを防く為めに一枚く粘附する方がよいと工風したのであらう。書物は糊心を中央にして左右を展開する便利は、挿画の例二頁に亘つてみるものを一目に見ることが出来る。文字にしても横きの立ち様なるの便がある。尤も此点は張り便利とするほどのこともないが、関聯して二頁と四頁となる絵を裏表に折ることのるのは特長と為すことが出来る。但し裏白が各紙に現はるゝのは嫌いのので、次きの裏白と合して小口を糊で粘する工風も自然に生じた。粘葉が何故

胡蝶装と意味まるかとこ、各紙を綴心の変じ
糊貼付けるからであつて、綴る糸を以てしたこと
いえ大和綴との大切な相違がある。大和綴い数枚
続くの十数枚を合はせ折つて、これを糸でとじ、他の
同じく折つたとじ紙と合綴して一冊とする。
胡蝶装と異る所は一枚宛貼りつけるなる
く、数枚続くい十数枚を合はせて綴るまあるも
一つ異なるのは、紙の質が支那紙と異つて
厚いから両面裏白表に印刷するのみで、裏面を
現はす不体裁いなる。胡蝶装と比べれば確かに
進んだ装法であつたに、これが遂に洋の装法と
同じ様なるのは一言の必、但し洋本と装釘を一つ

ことに就き、まんが偶然同じ
しとのみに就ては、未だ正確なる研究が無い。
○左に数の比ヲリンピック所感はスポーツ陣を率く
処人が早稲田学報に掲げた記事で、其の不感な
意味のあることを感ずる。亜米利加のやうな日本
を無理解の国民に対しては、的面に日本人を見せ
其の激烈の投価を示すことが、日本を理解せ
あるる、若の国者やるの外交宣を以てするとも
優ることは有ればあることは、此記事で示さんとするも
び、国際スポーツは学の(ママ)戦こと止まるべき、国民
交際を大なる意義があることが知れる、支那を
伴ひ悪宣伝を乗せんとれば、米人を見醒する

第十回オリムピック大會より歸りて

體育會々長　山本忠興

早稲田大學がその教育の兩翼として、言論とスポーツを以て天下に臨んだことは、我國教育界の偉觀である。我國がスポーツに對して關心を持つたのは、明治三十八年日露戰爭酣なる時、我早稲田大學の野球選手が安部磯雄氏に引率されて渡米した時からで、爾來屢々彼我野球選手の往來を見てをることは誰も知つてゐる通りである。その他ラグビー選手の濠洲遠征、陸上選手の英國遠征、その他バスケットボール、柔道、劍道等の各選手の米國遠征等は、何れも早稲田大學が他の諸大學に先んじたことであつた。

スポーツによる國際間の交際が所謂國民外交の一つであることは、屢々口にされるところであるが、無意識の間になすところの外交こそ眞の外交であつて、このことは今回の米國ロスアンゼルスに於ける第十回オリムピック競技によつて痛感せられる。我選手が齎した技術上の輝かしい成績については、當時新聞、ラジオ等によつて遺憾なく通報され、その記憶が未だ鮮かなる時であり、之を詳に說く必要を感じない。唯この競技を通じて齎し得た精神的方面について、自分の觀察し得たところを述べて見たいと思ふ。

我國の武士道が現代スポーツに於て、その裝ひを新たにして、古來養はれて來た國民精神の一端を表現しつゝあることは、最も喜ぶべきことであり又高調を要することである。しかしながら我國内の競技に於て、假令このことが無意識の間

榛原製

に行はれつゝあるに不拘、我國民が特に之を無識せざるが如き感がある。然るに今回のオリムピック競技に於て、過去に見ざる多數の選手が出場して、その不用意の擧動や片言隻語の間に現れる我國運動精神が、三十數ケ國の出場選手の間にあつて、斷然光彩を放つて、日本の選手は競技精神に於て世界に冠たりとの讃辭を、諸方より浴せ掛けられたことは、啻にこの競技に與つた者のみならず、國民の會心の笑を禁ずること能はざるところであらう。

試みに這般の消息を明かにする爲に、この競技の前後に於ける米國大新聞の記事の變化を、數例によつて示して見たい。日本選手が到着してオリムピック、ヴイレイヂに宿泊した當時、一新聞は選手の採れる食事を批評して次の如く記してをる。

『日本選手は多分固有の日本食を採つてをるであらうと思つてゐたが、米國の食物を採つてをるので驚いた。朝飯にはハムエッキスやその他がメヌに加へられてをる。日本の選手は食物に於て米國に妥協してをる。かう言ふ調子でジュネイヴでも、餘りに角張つた理屈を言はないで宜ささうなものだ』と

然るに選手の練習を見るにつれて、某々選手の記錄や態度を賞讃する記事が現れ始めた。そのうちに七月三十日になつて、入場式の當日百數十名の役員選手が、秩父宮殿下御下賜の大日章旗を先頭に、堂々と入場した凛然たる又正々たる態度は、此日の偉觀であつて、之を見た在米邦人が一齊に感激の涙を催した。そして老人の如きは二三十年來始めての喜びであつて生甲斐があつたと迄喜んだ。やがて競技が進むに連れて、次のやうな記事が現れた。

『日本の選手が多勢オリムピック競技にやつて來ると聞いた時には、上海であゝいふことをやつた嫌な小さい連中が來るかと思つた。然るに選手達が到着して交際つて見ると可愛いゝ連中と思ひ出した。そのうちにこの連中に勝たしてやりたいやうな氣持さへ出て來た。』

第十回オリムピック大會より歸りて

又記して

『馬術の選手たる將校に交つて見ると、實に快活で友情を感じる。この日本軍人と滿洲にある日本軍人とが異つてゐるわけはないが、云々』

と言ふ記事もあつた。競技第四日目は、西田選手が棒高跳に於て奮戰して到底破ることが出來ないトリオとして、米國々旗が三本ともメインマストの上に掲げられることを期待して、七萬五千の觀衆を引寄せて、觀衆の多さによつてオリムピック記錄であるとアナウンスされた當日、終に二者を屠り、米國選手ミラーを最後迄追詰て僅かに一等を得せしめたその日からは、日本人の勇氣とその優れた立派な態度に米國人は一齊に西田を賞讃し、日本人を賞揚するに至つた。一新聞紙の代表的政治記者は、特筆大書して、『七萬五千の米國人は、西田に應援し、軍の神は倒れたり』といふ見出しで

『この日七萬五千の觀衆は一齊に、その國籍を忘れ西田選手を應援して勝利を得せしめた。西田が成功すれば喝采を送り、西田失敗すれば吐息をついた。歐洲の外交家が日本人を唆のかして、米國と戰爭を引起さしめんとして、その前提の手段を構じたとすれば、眞紅な顏をして憤るのは西田だらう。』七萬五千の米國人はこの日、日本人はよい人間だと知つた。そして又西田に應援して自國人たるミラーに勝たせようといふ氣持で聲援した米國人を見て、日本人も米國人はよい人間だと知つて呉れた筈だ。將軍や外交家達の手管は無效であらう。此處にオリムピック競技の精神がある。』

その他竹中選手が、今回の選手中の最短軀に鞭つて五千米を走破し、最後に決勝戰に入りながら、途中一二等を爭ふ選手の爲に途を讓り、最後迄奮鬪したその態度は、勝を得た選手より大なる賞讃を博して、今回の競技を通して最もよい競技をなした者と迄賞讃された。

斯の如くにして連日優勝を續けた水泳選手と、最後の日を飾つた馬術の西中尉の優勝によつて、新聞紙は日本選手の讃

辭を惜みなく記して、今迄日本人の爲によい言葉を記したことのないと言はれる、ハースト系の有力なる記者迄が、凡ゆる讃辭を以て日本選手を謳歌した。そして近代スポーツに於けるコーカサス人の持つてゐる優越さは、日出る國に移り行く時があらう、と記した新聞紙もあつた。又二百のスポーツ選手を送つたことは、二百の外交官を送つたより遙かに外交的成功であるとも記されてをつた。

今回のオリムピック競技を通じて、米國人は日本人の如何なる民族であるかを知つて呉れた。日本人もその無意識に現すところの競技精神即ち我武士道の餘香を味ひ知る米國人を見て、米國人の純眞な心持を理解した。そして互にナショナルの感じを最大限に發揮して、相鬪つた各國の選手は全力を盡した後に全心を以つて互の友情を現した。赤裸々に我國民の個性を發揮したことは、やがて最もインターナショナルの友情をむすぶ種となつた。純粹なる愛國心が眞の國際心と一致することは、オリムピック競技に於て見らるゝ事實であつて、茲に眞の外交があるやうにも思はれる。我國競技界は水泳に望を囑して四年間の涙ぐましい努力を續けたが、そのことは期待以上に酬ひられた。陸上、馬術、ホッケイ、その他の選手も相當輝かしい成績を見せて、短日月の間の我國スポーツの進境を示すに遺憾はなかつたが、我々一行は無言のうちに「米國の人達よ！　日本人は如何なる人間であるか再考しなさいよ！　さよなら！」と挨拶を殘して歸途に着いた。日米間の暗雲も霽れて、太平洋は浪靜かなやうな心持をしてゐるのが、我々の僞らざる心である。

まゝに極めて有效の注射藥ひあつた。　十月九日記

○早稻田大學は創立後未だ世紀を經て五十年の祝典を擧ゐるに至つた。此時に當つて園丘の心頭に湧き來るまゝに、我と大學を築くに力を注がれ、既に白玉樓中の人となられた面々である。自分は此の祝典に際して物故者を思ひ出さずには居られない。自分は早大に特に此物語五十年史を執筆されたが、自分は物故者と就て都合で見ようと思ふ。勿論思ひ出すまゝの漫筆で甚だ粗雜なるものであることを恐れるのである。實は一昨年の夏偶と閑を得て、既と故人となつた早大の功勞者に就て略筆的に日々筆を把つたものが百餘人に達したが、但し四年世紀間の物故者は自分の書いた數に倍するものがあるも知れぬが、自分の直接交つた人でなければ、何も思ひ出すことも多いが、自然數が限られて譯である。えんを書くまでは考書の有るに比して據つたのであるが、もとより其人さの傳記を書くのが本意であるのだから、其人の性格の端中逸話を記述する放漫で、或る人に就ては簡單で、或る人に就ては詳細である。未だ交りの深淺、接觸の長短、年齢の長短、年齢の長短、長經かあるが、前後に錯綜してゐる。大体自分の交つた人の多くは故人となつてゐるのである。年代の漫筆であるから、特に思ひ出すまゝの順序に成つてゐる。

校訂之後二十八年[illegible]後の[illegible]あるべき或る時代に帰する[illegible]
[illegible]のあることを覚[illegible]等の人々の[illegible]今ではいと若き記
臆さんとへやうな人も[illegible]あるが、[illegible]小説の人は敢て[illegible]
[illegible]が特はその忘れんとする人を追懐し[illegible]の記
述を試むることに強き無益[illegible]思ふ。実
は故人から数を受けた校友[illegible]、座談会[illegible]
も催し、自分の知らないことを聴き、自分補足した
いと思ふてゐたのだが、今はその暇もないから、安物
記者の名の需めに任かせ、漫談そのまゝの原稿を
提供することにした。
えんは昔の報ゝ[illegible]
はしがき也

○富山市[illegible]の[illegible]が成つたのは時の[illegible]を[illegible]
する五階の宏壮の建物で[illegible]としては初体験と思ふ感
があつた。[illegible]氏が[illegible]の[illegible]と求め
て云ふのは紀年建築の成つた時、[illegible]は[illegible]
倍の四字を書あんとこと を記臆するが、其の[illegible]が識
[illegible]と今日の建築を見るにつけて[illegible]と云ふ長人[illegible]
[illegible]。今[illegible]は弘文報[illegible]の四字を書いて貰を[illegible]
一階から五階まで[illegible]歴史的に日本生[illegible]の各
種の[illegible]が陳列[illegible]。殊に自分の興味を引き
たひ[illegible]之止つて見たのは初期の出版物であつた。[illegible]
[illegible]の改訂版論もあつた。徳川時代の数[illegible]
四年伝書）大奥の女中（池田異渕）も[illegible]つた、[illegible]等

と思ひ出も深かつた。此の二書は自分が後年[illegible]を[illegible]
年してゐる此時、時々[illegible]
さ富山藩に貸つて荒年の金を得、また俳諧[illegible]が
酒資に充てられたこと。北陸富山藩も飢饉に際し
うつたが、坂本とは其頃から親密であつたのだ。主動
きはいつも其人の所産で、因[illegible]の金
融を[illegible]人にまかせてあるが、首交のかたかく[illegible]
明創立後の坂本は[illegible]今も自分
と提携してゐる東京[illegible]
は鶴山の先輩[illegible]人方[illegible]
大阪[illegible]出迎つた。[illegible]海の北の[illegible]
設計に関係[illegible]陳列品中[illegible]金が出し

[illegible]

[illegible]氏が大内[illegible]長崎が列品中
の第一位となつた。[illegible]人が東洋[illegible]
説を[illegible]
立つたと見くるが、自分[illegible]
[illegible]の[illegible]尺自[illegible]の日誌六冊[illegible]
[illegible]は坂本が前月[illegible]
[illegible]を持つ[illegible]
[illegible]。[illegible]の陳列中[illegible]富山方の出[illegible]
[illegible]故人の遺[illegible]
田[illegible]の地名辞典の[illegible]
[illegible]の言あり[illegible]が大概文彦[illegible]芳賀矢一の二[illegible]
士[illegible]特[illegible]一室[illegible]遺品の陳列[illegible]

つゝ大概の意味は言海の著作や校正掛が多く出版されその精力のほどを心身の盛しさもて、芳賀の家さん多く自業の和歌の短冊などが並んでみて、あの豪放の男にやさしい遺詩の如きものあるとは思はせたがいくつうの男をつくるとどこかに酒氣が漲つてみるかん思のんだ。最晩年五時の上の中央に小田君の四字寫汎論を題に詩幅が掛けられた其傍らに自業の省務がまく出版されたが其中に自分の表紙の如きものも数点あつた。小田夫人の話幅の傍らに小田義真の肖像が置かれ往年の遺品もあつた。其中に岩崎俊夫が義真と寫せし書簡のあるのを認めた。坂本の語るところ

義真は方言の研究の遺稿が百冊ほどあつて、やはり岩崎が寫真を義真に送りて座右を飾るの事掛(就)もあるとのこと。其芽に寫しに時岩崎の家に持込めば義真の主にあるとのことゝ云つてみた。北の海和歌の原田次郎(嘉雄)の跡刷にあつた。高山樗牛の資力の後援し関係から雄社人と敬意を排してみるの事なども思つた。明治一二年一月社を富士に入り坂本と齋藤と活し、今ゆき行しに紀念の高山樗牛を共に見せられ書物も考る。北冊子を高山樗牛と関係した話を書物の追憶録かなにもあるを余の家の分も入れてみる。

十月十日記

坂本嘉治馬は小田桐兵と同郷出身者の人で十歳

冥の時間を脱して出京し志を立て今日に到つたのだ、
感心な女性梓氏の遺族と云へば、梓氏殉後に記録
を焼き捨て世話を焼いてゐる東洋銀行員を始め彼の
[illegible]山家を訪ね就ての伺ふべき義
務から得て美を資本にやり出したのである、教科
書運動の嫌疑ひあり紙屋の者庶か手
を焼き収拾するとて羅を得たるまゝ出つゝ無つた
が、坂本トラストを洗したのだ幸ひ発かれた。
の教科書運動をなすべきとて
ル、去四年位ですら、亀のこんな運動に使はれ
ることがあるまの為の犯罪者の中に考が可ありあ
つた。貴合として坂本の居表と考へてゐるものの

東京製

後会の土地を踏む時立ちの方人が千円ゾ、[illegible]
しそくに比が、坂本も其二人ありたい。いつ云やる迄を
比いと思つて申入れると、今更遅年に反心ぬと帳
消しとなつて[illegible]おる

内上追記

京山家の紀念出版の首部と為人とする九思人
の写真が五六枚ある中に酒井佐保の自分
と母宏氏、其出佐人ひあること記けれ知つてゐれば
思人なるべの肖像が[illegible]ないこと[illegible]
うつ比、記事に就ても見るべき佐保の父融は坂
本の出京以来世話を焼き心配と[illegible]
比人なと云、融氏の今廿検査者[illegible]の

とがあつたと云ふ、さんが明治十八年とあるから、彼の
が一等検査官時代の推薦に係ることあか
と推察さるゝ、酒井伯爵家の子孫と云ふ
のび敬しと云ふのらしい、伯爵家の相続者たる者は
海軍大学の教官をつとめ明治四年に才三高等
学校をつとめ、極めて抗屈な武張つた性格の
男であつた。
高山彦九郎の伝記を研究する学者がいろ〳〵捜索を試みたが
東洋紀書底時代よりまだ溯つて調査する書い
たものは自分一人らしい（まだ全部を読んでいない）
今東洋紀書底時代を思ひ出す一事は、自分が高田
藩の藩校に入獄まることゝなつた時、藩主帯

複原製

刀は推一の図書にとゝまりのコメントにツリ人ヒロソヒー
二冊であつたこんの長崎に輸入の時分自から持
参したが、此図書こそ東洋紀書底の婚姻
である、其後友人が東洋紀書底からベーンの心
理学を輸入して来たが、山田美
妙が余の宅の時分に和訳してあつたが、今い
共に送して花市中の無い、この二書は余の大切
な保管物であつた、義兄有左さんは高山彦九郎
研究に出すべきことであつたが、時のことゝして
○故栗文り豊市底に醫書三巻と婚姻、器械
泰西外科、牧功と云ふ文化年間大槻玄幹の譯
する所也、其三巻に図を牧功と云ふ施術の

後備傳を施すことを云い、元無の人功を收むる能わず
とぼうす。收功の迅器美術帶と童きを異とする也
支那人は華佗の如き外科の大家なりしも備傳の術
を缺き、美し備傳の術を以て、美し備傳の術帶
八今商度婦の為すもの多しんば、日北法の日本に傳り
頃の間に能って熟心と錬習せること弗二卷の後りの
岩松良碩の跋文中にあり
前略一日玄幹子於芝蘭堂今諸生、且迎余令以
関焉、乃令諸生更或袒裼、或欵側、或
箕踞、或起或臥、或仰或俯、或面再目手脚皆
脚腹手、時臂腕手指手、腰臀腿脚踝跟手、
為有患處者、以受傳法、又令諸生、代執所製中

帶、或縱横交錯、或屈曲纏繞、或上下往復、或横
針中形、或輪旋数回、或合抱、備傳、或轉捩、或縱
折、以施其術、余則照図照書以傳叡焉、而察
其所行、乃藥切肌膚、無毫釐相贏絀、其後
急自中宜、其保持自致固也、實是極不可復
易之理者乎 注
玄幹小藥丸の子也、北書四卷を作さん眼科侍医土
生玄碩に授つて上梓せらる。
北日亦抵本二三卷を得たり、余りこれを読むに中と
解くるもの也、左の如し
伊勢国仁方墓法抵抵抵
江東産墓法抵抵抵

角倉氏蹟跡修復碑　拓本

頼山陽墓表　拓本

角倉翁恨らくは昔頃郵流干鉄投四石の宝を失ふ他日修補を勧めんとす

十月十二日記

○次日亦琳琅寒と一二の同志と燈下の瓶史一部銭牧齋の初学集有学集三快を繙く共に支那版なれど住本也有学集は詩注あり白紙本なれ共二回迄碧堂蔵京に渡りて得る所なり、銭牧齋の地二集は絶版の為めなるもの少なく、家君に学ぶ迄家に所しなる本部版を求むしが支部版を得ざりし初めて也友人の手許を経たるものなれば跋を求むる一時此の二集は極めて高價なり

[illegible]

[illegible]が今の漸やく價低廉して二十五日なれ年なれ入りたるの外に環秀堂法帖一帖を繙くこと数日なれ寓目のこと多くは文明名家の遺跡を収む元の許魯齋[illegible]と曰題跋の筆共に及る倪元鎮、趙孟頫、沈石田、祝允明、唐伯虎、文徴明、文三橋等を曰羅[illegible]郷の輯なり也

○早大の五十年を紀念するに当り世紀の早稲田が出版せんとする[illegible]の出版輯るいつる自分が共つれから[illegible]の西村真次の手に編輯せる自分八全部の共にくるくるとなる。●六百頁と称する大冊にて可なりあもしろく出来たるなり。廣告の五十年を出版

北の校五十年史へこれを報へると時の校長
つれ。早稲田の高等師範がみなさん大ぜいあるから、知れる。学校
も五十年の歴史を積まれた。既往のことも善悪ともに
とかいろいろ書きたいからいろいろ面白いお世話をしてくれる。北の早稲
田のお世話をしてくれる。自分の干渉したこと、高等師範書けなくてもいくらかある
ハ、自分が校長の後を立ての聘を受け、自分が新
南つて治めたやうなものだが、自分のまい卵も筆が出来
でゐるへ。それから五十年史い完成の歴史といふ
いう係し自分ハ大概のことを干渉してゐるから、自分の
名が出てを現はしてゐる。北の一番の校史の自分の経
歴を語るインデックスの物語なるが、時日の記臆な

樣原製

経験のある人々をいつて大切の記録である時事
数後も他人にも感慨を洩らすことが多い。

（十月十五日記）

○此年からものの力を入れ北海道の
ものだ。成行を熟考つてゐたが才一冊の配本を校
了した。北の書の表題い自分が書いたもの、本五巻が
先の出版さんに。内容に真理山皇陵記、北海太平
記、後醍醐帝記、秋山紀の四種である。繰刊の果し
て売捌て出来るかどうか、常事者が無責任だから前
途が気遣はれる

（以上記）

○昨日の書史を今日貴人と宮中を竹内侯爵（正毅）
の宅へ分ち史の孫前の書籍を選定し且つ書

文芸今こゝに紹介す月刊雑誌なるの出版の図書并に其
影響を心つくこと甚だ少なしつきて時間協議し以て
の要を要約して数ず而の説明の図書の中数の
稀覯のものを、次の如き目を掲ぐ

一切支丹太平記　二冊

こんハ英人サトウが往年田中光顕伯に依
りて写ひとるサトウの回覧膳を添くあ
り、本邦の書を借りて一本を存するの
みなる由に志紙を供記もとして伊藤
同じ切支丹新教の義集を志紙を
こ始計しあるを義又しく鄭重には

きこえるこゝの十二頁、之れを帙に整頓しあ
り、英のブリッテッシュ、ミュゼアムには六十枚
あるよりも新材を追吳の第宮を
掘り来るまの帙の前部に新りつけな
り、長覧の価値ある興味を覚ゆ

一宋本三世相

人三寸四方の大本也　体書なる流布と文
字宋代の様式を挿絵も多く、親帝
の二回二頁とを引き来る様式を覚ず

一宋本育傳　二巻

一切経中のものなるを初稿なる跡也

一宋本中庸　一冊

此書市橋長昭が幕府に献じ給ひし図書の一
なる巻尾なる三疫の考に引く献本の次第
を録し漢文の跋あり、御本の記あ
る一冊也

一 醫治四察　写本
曲直瀬道三自著の醫書なり、中に
永禄年号の跋ある巻尾に元亀年
號の自跋あり、

一 尉僚子　一巻
金澤文庫蔵なり　印記あり遠
藤二年北條顕時の手写なり係る
樂菊公の評跋ある七書の一なり

と金澤文庫関係の人の書簡と見ゆ、
貴重なるべきものなり

一 其自家文草
大本写本也　家康尾張徳川に出でし
人典籍の一也　今まで駿府御本の朱印
を捺す、北印寄百)凡る印と異なり　攻めべし

一 江湖風月全集　一冊
五山版なり治雪和尚の跋横の書入で
跋面を填めたるなり珍也

一 阿育王塔傳　一巻
宋版大字本也　荒木の剥落跋横あ
るも横書きもキレ　大字書ぶべし巻尾に

笑宋開寶五年歳在壬戌南獅子
地陸一十三 序係 堂頌交割書の得
云々

とあり

一 壽命院抄つれ〳〵草 二

こんハ近代或る書肆の複製なり 多分本之
乙丑長法寺本也

此他宋版の充棟集十冊あり、宋版東坡詩
集四帙あり（三春大庫の印記あり）宋版佛
國禪師文殊指南圖贊一卷あり高山寺本
答覆二圖あり、宋本佛果圜悟真覺禪師の
師心要二圖帖あり、南立山版杜工部集

榛原製

二十卷あり

以上皆稀觀の書なり 餃亭の完大零仄を
免かんとするハひとり餃亭の幸のみならず
書史をして未十一月四刊稀觀長洲今を催
さんとし出陳同市日和川漱主任うて書生しかる
この左の牧ある所の如し 総計八十點あり、長洲
の先ひとり一冊の影譜を出さんこと余が永年の結望なり
書也、去る四刊稀書今所在時を分ち或る除
外ハあれども出し複製を敢て拒まず、一部
四刊の大觀の書を心ゆくまで先
輩好書家の所蔵を成し得たるもの 今こん

を果し得ない時勢の進歩と云ふを得べく、此の事業は毎月義本影講の会席の栄として誇るを得べし　昭和七年十月

○二三の前拙著永井柳太郎氏に提えんとも思ひ重大使命ひあつれど宜敷で一方の繁務を考へれば其序で永井氏大限侯を劉と低つる此話ぶ出れば誰れもの話さ、あれは拙馬曲也かと言ひたのと言ひたが永井氏は馬曲也と手傳つて貰つたと言ひたからいくらか身もちがへらしいのとんえ低れが身分の半ばを考へるべきと言ふ左国次郎大限侯を涙すると言ふことで永井氏は日優れはつたりのガウンを着した大限侯に拾した

榛原製

永仁書寫刊　東大寺

一四、三国佛法傳通縁起　応永元年刊　東大寺

元亨釋書　同（明徳重刊）　圖書寮　成簣堂

一五、妙法蓮華經　文禄四年刊（春日版）　東大寺

三五、三六、五味禪　十行本

三七、三八、夢中問答　八行本

大字本　右井氏

小字本　成簣堂

一六、四種愛陀羅義　建長八年刊　成簣堂

三九、饅頭屋本節用集　帝国図書館

四〇、天正版節用集　岩崎文庫

七、悉曇字紀　弘安三年泰盛刊　安田文庫

四一、四二、四三、四四、四五、聚分韻略　大内版（天文八年刊）　帝国

永正元年刊　帝国

文明　薩摩版

八、般若心經秘鍵　永和四年刊　成簣堂

列陳諸定書目（其の一）

一、陀羅尼　安田文庫
二、妙法蓮華経巻第二　承暦四年識語　内野氏
三、大孔雀明王経巻下　保安三年識語　久系文庫
四、成唯識論　寛治二年刊　聖語藏
五、成唯識論　鎌倉中期識語　安田文庫
六、因明正理門論本　貞應元年刊（春日版）　岩崎文庫
七、維摩詰経下巻　文永四年　聖守刊　成簣堂
八、法華遊意　建長四年刊（聖守）　安田文庫
九、大乗起信論　寛元元年刊　安田文庫
一〇、法華義疏　宝治元年法隆寺刊　久系文庫
一一、梵網経菩薩心地品巻上　康久二年法隆寺刊　久原文庫
一二、佛母大孔雀明王経　貞応三年刊　帝国図書館
一三、法華義疏　永仁壬寅刊　東大寺
一四、三国佛法傳通縁起　応永元年刊　東大寺
一五、妙法蓮華経　文禄四年刊（春日版）　東大寺
一六、四種受陀羅義　建長八年刊　成簣堂
一七、悉曇字紀　弘安三年泰盛刊　安田文庫
一八、般若心経秘鍵　永和四年刊　成簣堂
一九、声明集　文明十年刊　京大
二〇、即身成佛義　永禄五年根来寺寶仙刊　成簣堂
二一、秘蔵宝鑰　康暦二年刊（根来板）　成簣堂
二二、文安　年刊（根来板）　安田文庫
二三、四分律行事鈔　建長四年泉涌寺刊　東大寺
二四、比丘六物圖　寛元元年刊　岩崎文庫
二五、大乗玄論　永仁三年刊　成簣堂　石井氏
二六、黒谷上人語燈録　元亨元年刊　龍谷大學
二七、往生要集　建保四年刊　日下氏
二八、首楞厳義疏注経　師直板　圖書寮
二九、尊氏願経　三種（異版）　安田文庫
三〇、華厳経　貞治四年武蔵刊　久系文庫
三一、元亨釋書　同（明徳重刊）　圖書寮　成簣堂
三二、五味禪　十行本　大字本　小字本　石井氏　成簣堂
三三、夢中問答
三四、饅頭屋本節用集　帝国図書館
三五、天正版節用集　岩崎文庫
三六、聚分韻略　大内版（天文八年刊）　永正元年刊　帝国
三七、文明薩摩板　帝国
三八、
三九、
四〇、
四一、
四二、
四三、
四四、
四五、

（其の二）

四六、景德傳燈錄　三種（異版）　成簣堂　谷村氏

四七、勅脩百丈清規　文和四年刊本　安田文庫

四八、四悟心要　應安四年臨川寺刊　安田文庫

四九、五家正宗贊　妙範刊　帝國圖書館

五〇、空華集　成簣堂

五一、蕉堅稿集　同

五二、一山國師遺錄　應永重刊　成簣堂

五三、同　明德嵩刊　帝國圖書館

五四、碧巖集　應永八年刊　大阪府立圖書館

五五、同　能登板　安田文庫

五六、月林和尚語錄　貞治二年刊　圖書寮

五七、雪峯和尚外集　貞治妙範刊　同

五八、虛堂和尚語錄　正和二年刊　同

五九、諸偈撮要　應永十一年足利行道山刊　同

六〇、臨濟錄　延德三年刊　成簣堂

六一、黃山谷詩集　大字本　內野氏

六二、同　小字本　文求堂

（參考）宋版

六三、醫書大全　阿佐井野板　安田文庫

六四、懷求　陳孟榮刊　帝國圖書館

六五、杜工部集　石井氏

六六、永樂版韻鏡　安田文庫

六七、八十一難經（盛前版）　帝國圖書館

六八、江湖風月集　內野氏

六九、歷代序略（天文二年駿河板）　安田文庫

七〇、歷代帝王（五見之國）　永和刊　安田文庫

七一、寒山詩　正中刊　杉浦氏

七二、正平版論語　大阪府立圖書館

七三、古文尚書　高木氏

七四、毛詩鄭箋

七五、延德版大學　懷德堂

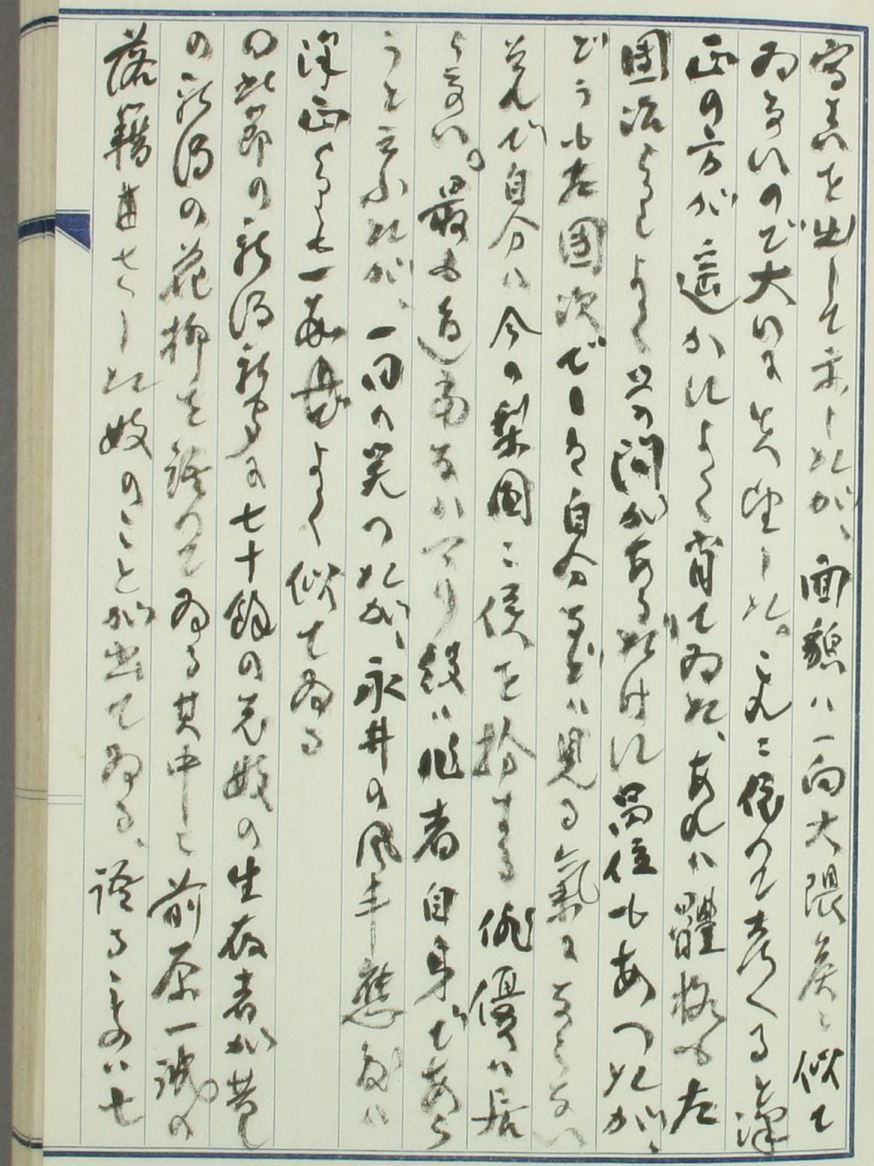
七六、左傳（參考）宋版

七七、柳文

七八、韓文

七九、咸淳集　成簣堂

寒山詩　西中刊　杉浦氏
西平版論語　大阪府立圖書館
古文尚書　高木氏
毛詩鄭箋
延德版大學　懷德堂
左傳（考考）宋版
柳文
韓文
盛齋集　成蹊堂



字を出して来したが、面貌は一向大隈侯と似て
おらないので大いにそやされた。えこ位つて考くる涼
正の方が遠かれしく育てみれば、あれは體格の大
国法ちゃうの河かちゃ所れ出位もあつたが、
どうも大国次でいろ自分の気に入らない
そんな自分は今の梁国こ侯を拾ふ俗僧は長
らるのの最も有名なる人物であり殺は他者自身であら
うと云ふ所が一日の実つたが、永井の風手慈ない
深面ちゃ一面無よく似てゐる
の北部の新乃新乃七十餘の老婆の生存者が芸
の新乃の花柳を新乃をみる其中と前原一誠の
旅舎せくりに故のことが出てゐる。語るまい七

十一月末ニ至る俄の目ずし松四の天ぷら左のごとし

○富山屋のおあさんハ瓜核殻ぴ品もよく氣前もよく
つれが宮田の前原一瀬ぬさ千あぴ引かさんとは其
頃の千あぴとから大いる差まんとうぴあるに後の前
原板がこくろうんとめら、東堀仮四の殿上の親戚
の賢を切つて頂を宮のもみ紙が、私共仲間ハ御
隠居さんと敬称しなる。

行安地ハえんの左の注を附すべし

千あぴ、うかさんとの金華隠の隠出徒柳の小井氏
が金を出して建なつたのとなつへて
り一枚上の印部屋のおきハ主伝の岩村氏の本家

榛原製

とろう子供の深山あつたのる出世もあると

○犬養木堂の貴族節ハ就て楠瀬日年ち語る或
の人ハ文房具ニ関する宝でみる、硯ハ最も多く
の蒐集ぴとなる銀硯も多くあつたが蒐集の旅る
ることあんと七千円の値が付ける方円のもの三百円の
硯いこ四十を数ふ墨も数十の黄金のものが
ある程最高や花蔵御墨ちいはざるあるて
五七十を数ふとうふ、法帳ぴ蒐集ぴみるが其の先
ちるこの八武定本蘭亭書帳ぴと云ふ、

○表印刷会社が振市しるのる旅行主婦の友ハ近
々送付し来日帰七十三巻を達しぴ今月
印刷中名に十巻増加ぴ。去年の十一月

に比すると正さに九十萬の増加である、此年の一月節
は百萬に達するであらう、此の女の旅行が進展
すればする程他の女の旅行は自ら独立を帯び
る譯であつて、恐らく主婦の友が女旅行を壓
倒して一統するの日があるであらう。此の旅行を
印刷してゐる本社は他社の羨望の的となつてゐ
るが、いくら高速輪轉機があつても完成十萬の減
増すれば間に合つて仕拂ふ、此年は毎年の例として
主婦之友社の社長以下の幹部を招飲し此が此の
得意先に對して自分も臨席するのが例で
自分は本社がてゴワイて貴社に迷惑をかけ
る時がいつも貴社の大繁栄の時であるが[redacted]

どうかお目出たいは貴社の處事と免じても御容
赦ありたいと挨拶をした

十月十八日記

○早稲田大學五十年を紀念する第一日が大隈侯
長高田総長の除幕を行ふ日で幸ひ天日好晴で
あつた。大隈侯の今回の銅像はガウン姿で学帽
を載き杖を突いて[redacted]の等身立像である
侯は實に此姿で此論事に於て学位授職
式に臨まれ演説をされた、態々両館完から生
けるが如く、温顔微笑を湛へ例の如く口を引き
めて居られ風手は如何にも真に迫つてゐる。杖に
力をこめて居られる姿勢も申分がない、此者朝倉
文夫は侯と親炙した日来帯の銅像を作つた経

験もあるとて各々此の製作にかゝるべく出来た大隈
先侯没後十年　大の音とおさまらしい銅像の成つたこ
とは云へど時機を得て居る、侯の厚手は今後式典に
その後に曝露せしめて大なる感化を与へるであらう
書御像は大隈侯邸の西廊に移して長く保存す
ることゝなつた。校友の有志の逸品として誇るべき高い
偉士の銅像は日時と除幕式とを
著けて持手に渡つてゐる。像は若井造法師
沼の製作に係り、大隈侯の右手を揮くられ、こん
も好る上出来である。往来の銅像の制作は如
る硬いつた姿態が多くやてらこの味が足を潮く
のが溜で居るばかりであつた。此の銅像の製作は

かく進歩した。
大隈侯の銅像は特に心を傾けて病少しく係を心
つけ、こんの校友に頼らんと僅ばかりの
校が他と比べたるの比が、自分の家の物を愛す
比、侯の小銅像のこんまり二三回のつたことがあ
るが、飽り上げかるまいので自分の愛鍵を捧げ
たことがあるこうとが、なかなか家に帰あること
迄まである。堅一人許のことである。
○昨日早大五十年式典を奏する南のうち秩父宮
殿下が御名代の格で御台臨を賜はつて器光い
大いに緊張した。○二時ともなれば殿堂で
のれ自分は一時に大隈講堂に入ると最早満員

早稲田大學創立五十周年記念式典日程

○十月十七日（月）

一、故大隈老侯高田前總長銅像除幕式　午後一時　於校庭式場

二、招魂祭　除幕式後　於招魂殿

○十月十八日（火）

一、記念式　午後一時　於大隈講堂

二、饗宴　午後三時三十分　於大隈會館庭園饗宴場

○十月十九日（水）

一、祝賀式　午前九時三十分　於戸塚運動場（但シ雨天ノ際ハ於大隈講堂）

入場者　教職員、學生、校友

二、物故者展墓　午後

三、校友大會　午後五時三十分　於東京會館

四、展覽會　自午前十時至午後三時　圖書館　演劇博物館　理工學部

○十月二十日（木）

一、學術講演會　午後六時　於大隈講堂

二、展覽會　自午前十時至午後三時　圖書館　演劇博物館

三、餘興（演劇）　午後一時　於大隈講堂

入場者　學生

○十月二十一日（金）

一、學術講演會　午後六時　於朝日講堂

二、展覽會　同　於横濱記念會館

三、餘興（演劇）　自午前十時至午後三時　圖書館　演劇博物館　理工學部

入場者　學生

○十月二十二日（土）

一、學術講演會　午後六時　於大隈講堂

二、展覽會　同　於帝國教育會館

三、餘興（演劇）　自午前十時至午後三時　演劇博物館　理工學部

入場者　學生

○十月二十三日（日）

一、展覽會　自午前十時至午後三時　演劇博物館　理工學部

二、餘興（演劇）　午前九時　午後一時　於大隈講堂

入場者　學生　教職員及家族

三、溫交會　午後六時　於帝國ホテル

以上

の盛況であつた、法理大臣文部大臣米國大使なども
早く来着して式壇の席に就かれた。殿下は先づ
大隈伯爵と御著席あつて、御座を御内の者に命じ
陸宮に設け、こゝに伯爵以下閣員を招ぎ
り、書院に陸列した二種の四寶（早稲田四寶）
外交官、内閣に関する国者も御招きした。
卿は其他に大隈老侯在そして南ロと四ーく盆
栽を陸列して飾り立てたが、どこの大学も斯る
休憩所の後援あるものと思ひしめた。宮殿下臨
場の時は式壇の中央に設け、その右側に式部官祝辞を述ふ
る席を設けた。

殿下は早稲田のスポーツに興味があらせられ、早稲田の野球の
プアンと申しても、公式に早大へお出ま
ることもあり、演劇場に御臨場遊ばされ
ることもあるが、今日は皇上の御名代として御著
坐遊ばされ、著論宮殿延の儀礼に伝ふの
儀式に授ぜられ、私学の宮内者と諸般の手合を
したことの申すまでもなく、殿下は陸軍中尉の
軍服を召され出席あつた。自分の坐席が正面
式壇上の殿下と右側にあつたので、御風手を
悠然の変と称すを得て、その三十年の昔のお姿の
血氣のようにお顔と、濃く厚く光澤ある頭髪
見奉つて、雀を戴く首相其他の老人と對照

早稲田大學創立五十周年記念式順序

昭和七年十月十八日午後一時於大隈講堂

御差遣宮殿下御着　午後一時三十分

一、一同着席　（一同起立）

一、君ヶ代奏樂　（一同最敬禮）

一、御差遣宮殿下御臨場

一、開式　常務理事　金子馬治

一、式辭　總長　田中穂積

一、祝辭

內閣總理大臣子爵　齋藤實君

文部大臣　鳩山一郎君

米國大使　ジョゼフ・シー・グルー君

慶應義塾大學長　林毅陸君

早稲田大學校友總代　伯爵　松平頼壽君

一、歐米各大學祝辭祝電披露

一、校歌　（本大學學生合唱）

一、天皇皇后兩陛下萬歲三唱　名譽總長侯爵　大隈信常

一、閉式　常務理事　金子馬治

一、御差遣宮殿下御退場　（一同最敬禮）

一、君ヶ代奏樂　（一同起立）

（右終テ饗宴）

一、御差遣宮殿下御發車迄其儘着席相願候

一、御差遣宮殿下御臨場ニ付服裝御注意願候

一、來賓受付ハ午後一時十分ヲ以テ締切可申候

して吏等は快感を抱くところなり。宮の名称を先ず高
有り教育奬励の中興なりとなつて七月高田の恩師
が為めなる田中綱先は式辞を陳ずる先ず、御沈
書の披露に続き人心。式の別紙沈黙書の高等五十
行行四十分間長講の間に無事終り、本等五十
年の歴史を辿るまで深夜の感涙を誘ふ。
南人の御名代宮を迎へ奉る者の共心は敬
護に尊遺憾なきを動きまるなり、沿道の敬
戒の数は祝賀に於て例の如く南数の敬礼を受
きしなり。学校では花形門に学生が迎の為め
道の両側に情列し、こんなる歓迎を取締を行ふ
人に苦しく無くこと。今の時勢に最の折れる

のは北堀のことなるのみ、宮殿下をお迎へ奉るのは
重宝な容易でなく、殿下は特に自動車の帽
を脱つて情列の学生に会釈遊ばされつつ
式終つて大張今野庭園にテントを張つて大会
今春を設け来賓数百名才名今
しと中に高友なる来られ中に土方宰石
川千代松平田張衛門堀越さと歓談した
両日校友先輩の中には久方振り今昔の人
もあつて、酒次懐旧談が湧き大いに興を完
へた。

唯一の肖像畫に

甦る岡倉天心

故觀山畫伯の遺作

アメリカの美術館から美術學校へ寄贈

最近米國大使館を通して東京美術學校に贈られた故岡倉覺三氏（初代東京美術學校長）の肖像畫が寄贈された、この畫は大正十一年の日本美術院再興第九回展に陳列された作品の下畫で

現にフォッグ美術館の東洋部長をつとめてゐるラングトン・ウォーナー氏が往年の助手をしてゐた當時觀山氏とも親密となり記念に贈られたもので、縦四尺五寸六分、横二尺二寸七分、畫柄は天心居士が愛用の支那の道士服に靴をひねりつつ、「平家物語繪巻」の詞書を認めてゐるもので、画面の草稿には岡倉氏の直筆が貼りつけられたものである、院展出品の作は實業家長澤延次郎氏が所藏してゐたが不幸大震災で焼失したので觀山氏がこれを非常に惜しみ下畫に補筆彩色したのが今回寄贈されたわけで全くかけ替へのない貴重な記念物である

美術學校では來る十一月四日の開校記念日にこの肖像畫を本館として岡倉氏の各關係者、同校關係の出品畫を特別陳列して展觀に供することとなつた、故人畫家としては芳崖、雅邦、廣業、春草、觀山諸氏の遺作も陳列の筈（高眞はその繪

寶珍界學

『帝王略論』の芳可書

全五卷のうち三卷を發見

何處にあるか？

あと一卷はパリに、殘る一卷は

（寶玉展觀會場にて撮影）

種郵便物認可　第二万百八十五號

慶賀の限り

内藤湖南博士語る

唐の慶世南の著した帝王略論は、古く日本に渡つたものと見えて、日本見在書目にも載つてゐる本で、新唐書の藝文志にもたしかに載せられてあつたと思ふ、唐時代有名な著錄であつたが、支那ではとくに絶書となつてゐる、先年フランスのペリオ氏が、支那燉煌からその一部分を得てかへり、現にパリの國民圖書館に保存されてゐるが、自分も先年同圖書館を訪ひ、この本あることを見出して許を得て寫眞にとつて歸つたほどだつた

・この・

本は早く日本にも傳はつてゐたことはその後京都の書肆佐々木竹莨樓の先代雅行が、その筆記の中に、帝王略論を見たと記してゐるくらゐだから、この本の存はれてゐたことは明らかだが、自分たちもパリで初めて、驚嘆したほどで、これまで一切見ることが出來なかつた、ところが今からふれこれ二ケ月ほど前だつたか、さる人からこの本三卷を見せられたことがあつてゐる本で、新唐書の藝文志にもたしかに載せられてあつたと思ふ、唐時代有名な著錄であつたが、支那ではとくに絶書となつてゐる、先年フランスのペリオ氏が、支那燉煌からその一部分を得てかへり、現にパリの國民圖書館に保存されてゐるが、自分も先年同圖書館を訪ひ、この本あることを見出して許を得て寫眞にとつて歸つたほどだつた

・この・

本は早く日本にも傳はつてゐたことはその後京都の書肆佐々木竹莨樓の先代雅行が、その筆記の中に、帝王略論を見たと記してゐるくらゐだから、この本の存はれてゐたことは明らかだが、自分たちもパリで初めて、驚嘆したほどで、これまで一切見ることが出來なかつた、ところが今からふれこれ二ケ

て、果して日本にもこの本の遺つてゐることを知り、大喜びしたことであつたが、今度東洋文庫に納まつた本が、正しくその本であることも不思議といへば不思議な因緣である

・東・洋・

文庫が得た本は第一、第二、第四の三卷で、全卷のほゞ五分の三が新たに發見されたといふわけで、學界の慶事とせなければならぬ、この本の元の巻書によると、治承、文永等の年號があり「以總知官公氏之本書寫畢校了」とあるところから見ても、古くから官家には傳はつてゐたものらしく、いふまでもなく官家は紀傳道の家であるから、この種の珍本が多く傳はつてゐるとが想像される、この本、その紙質や書風から見てもわが鎌倉末期の寫本であると考へられる、この項には支那にも張即之の書風が行はれ「孝經」や「老子」などに同じ筆蹟の寫本を見るが、この本も全く同じ手蹟で

・パリ・

の燉煌本に比し新らしいものではあるが、それと合してほゞ完本に近く、古くから求めて得られなかつた逸書が、今になつて出現したことは學界のため祝福せざるを得ない、この書の内容は著者慶世南の史論で、歷代帝王の論賛のようなものであるから、これによつて新らたに史料を發見するようなことはないとしても、唐初の史論しかも有名な慶世南の史論であるから、歷史上の著述として珍奇なものたること勿論である

○早大創立五十年記念の日に早大の教授小林久平氏が母校創立と因緣深きこの梓の書を惜しみ來り余の書室を訪まれのち所感を述べ特に記念式典の終れることを喜ぶ

樣原製

梓氏の詩いはく

鐵路直通原湿河、塩湖々上夕陽殷、春風未洽優塵地、白雪猶殘樂毒山

中来鐵路東上　涵梓

○早大創立五十年記念の日に早大の教授小林久平氏が母校創立と因緣深きこの梓の書を惜しみ來り余の書室を訪まれのち所感を述べ特に記念式典の終れることを喜ぶ

早大創立五十年記念の日に早大の教授小林久平氏が母校創立と因緣深きこの梓の書を惜しみ來り余の書室を訪まれのち所感を述べ特に記念式典の終れることを喜ぶ

梓氏の詩いはく

鐵路直通原湿河、塩湖々上夕陽殷、春風未洽優塵地、白雪猶殘樂毒山

中来鐵路東上　涵梓

○早大創立五十年記念の日に早大の教授小林久平氏が母校創立と因緣深きこの梓の書を惜しみ來り余の書室を訪まれのち所感を述べ特に記念式典の終れることを喜ぶ

○畠亭馬琴が歿後八十五年にあたる今日、下谷の某

提寺深光寺住職仲義晋氏寺に馬琴の
遺品の陳列をすまこつき行なはれ此外十一
月四日上野の松坂屋に於て馬琴に関する講演を
なすことゝなつた。徳川宗家の方も和田ちゞ、代と夫々出
席を頼まれたが、さて何を語るべきか、何を語るべ
きことが多いので、何を捨てるべきかの選擇に困しみ
を多くの間を得た工風したのは、春寿寺住職の
馬琴墓の立かつたこと。早稲田大学図書館に馬
琴の書簡である由来、早稲田の図書館で馬琴の書
を陳列をしたこと、また幽機像とそれに音姫の掛
幅及馬琴に就て講演をした時のこと、亮が郷土の
北秋雪譜にから馬琴と京山を通して見た馬

樣原製

琴、馬琴と頼山陽の日本外史、これの就ても大体語り
て見る積りである

○早稲田大学が創立五十年を祝し連の慶びに満ち
ある際に早稲田大学を皆果する日清生命保
険会社が創立二十五年(明治)とそれに偶と新築の事、後成
しるを以つて二十五周年の祝典を盛大に新築を投
露することゝなつた。二十五年の進展もそれの
と祝保額は壱億六千万円と達し、財産の三千五百万
円を算す。北今社が屋と住地を換へ、今度は大手町
二丁目今社ビルヂングを建築し二年五ヶ月を要して入
パニッシュ、チッサンス式の八階建、延坪五百四十坪
新築が成つた。建築費百四十万円、附帯工事

費百萬圓、坪あり三百六十四坪と云、建築材料の
低下し此際と云うを若み学者の伝会を、お由高
き為に着手したるも少くとも坪当四圓を要したる
人と思ふ、祖の上出来なる、各室をザット通覧するに
事務室等の内体なきも、永楽倶楽部
こそ、之の法色の七階建にて、之こそ倶楽部にふさわし
いものと如何も感じた、諸室の装飾、お由高
匠を凝らし、設計者と技師の苦心を
見る、伝教の高く、設計の高尚なる、一日竣
すると、全部住かさんとのむ、この建築及び愉快と思ふ
まして実うしたるも無いと武場を分ち、美し伝教の
全心の心と思はれる。伝教の十ふるる建築家の苦心を依

榛原製

教者の苦心を表現する所の苦心、苦心花
漢、なるもの、美を診察し国宝を探り南て、美
こるの陰を七時ぶるるぬかいるの客多ひるの、美術
るる苦心とは、果して統果いうまく行つたかどうかと
かんが、先と第三四年経ても義着きを見て驚く
ひたいと云ふたが、なるもとうぞかん。受賞は大井組
で共、人は早稲田出身である者の伝教の指図が毎よ
く行はれたことも成りの一番国であるとの御意上に
北土地の氏神様(道三稲荷)が祀え、時計塔のチャイ
ムベルが特色さん特徴のメロディーを各十五分毎に鳴
する、これ、べんの研究るの二)を三年間を要したと云ふ
(十月廿一日記)

○浮田和民博士が帝国文明協会の雄弁を吉いて日米
愚戦論の左の如く言へるあり
世界大戦の第一教訓は何であるかと云へば現代文明
の状態に於ては糧食供給の根據地から遠く離
れて長距離に渡る戦争の実際不可能なこ
とである。世界大戦や一国独逸の連戦連敗であつ
たのは軍隊に糧食を供給する根據地から二百
哩以上敵国を侵入することは出来ないから。又英
仏露側の聯合軍は独逸の内部から五千哩
する其海を以上の半距離に侵
入することは出来ないから。南阿戦争の際
ボーア人は僅かに七万五千以上の兵を

榛原製

繰り出すことは出来ないから。英国は三倍和を
九万五千敵する兵を流出して戦争し、英を二倍
にまで増し、四倍にまで大を以て軍を
遂に八十九万の大軍を備へやつとのことで
勝利を得たのである。世界大戦は米国の巻か
ず別天地独逸を孤立し、日本は独逸と比す
ると米国の根據地を距ること四倍乃至五倍くら
あるから、日本を孤立することは独逸と比して
四倍乃至四倍乃至五倍くらい難しいのである。英国(南阿)は離れ
るボーア軍七万五千人に対し八十九万の
大兵を要したとするならば、ボーアと異つて
強大の海軍を有する日本の精兵を日本に

於て破らうとするのは日本軍隊七萬五千に対し少なくとも米軍八十九萬の大兵を要するであらう。然るに防衛軍総勢五萬の兵を得て出撃することが出来るから、米国の英国が南洋に流出した大軍の六十六倍即五千八百七十四萬人を少なくとも出さなければならぬ。

以上は海戦のやうに見えるが真面目な意義がある。世界大戦の海戦と陸軍の流血を伴はず英仏聯合側が某に向って西部戦線の困難と無用なことを説いたとき、日本の陸軍部隊の援助を要求したことがある。二

横京製

ユーヨーリからボルドーまでの距離は三一八七海哩であるが、横浜からマルセーユまでの距離は九〇〇〇海哩以上である。そして日本から西部戦線に兵を送るには米国が佛国に兵を送る三倍義務を負はなければならぬ。米国のそれに比して五倍若くは十倍を要するとされる計算である。即ち軍隊を運搬し且つ補給を支持するには人員と物資を要するものを見積らなければならぬ。日本国民を扶持するに欠くべからざる船舶を海外の一切の船舶を使用しても、日本は佛国に向って十萬以上

の兵を送り又これを支持することの出来ぬといふことであつた所が公平なる批評家の見を正確なる計算とあつたと認めたのである。

今米国が日本に向て遠征軍を送るとすれば其の艦隊は日本から佛領印度支那を経て弱と四日と又ちかけれども遠くあれども何故ならば此場合に素港を基地とするに過ぎないからである。兵隊及び糧食の出発地としては中西新の或る港を選まなければならぬ。

又米国の糧食は日本の為に比して倍以上を要するから米国を極東と流血をするまんまくらいの一八余り十八艦隊を要することゝなる。一九二〇年十月一日米国所有の船舶総数の三四〇四四艦

（重量七五〇噸以上）七千六百八十三隻であつた是程の大船舶があるも グアム島以西フイリピン島及び朝鮮若くは日本の兵を送ることゝすれば九十三万九千人の人数八一人七名を得ることゝなるのである。

日本から米国を逆襲する場合に於ては日清戦争のフイリピン群島や布哇を占領し素港と十番の兵を上陸させ浮ヒところび次郎の日本から二万哩米国の関つて来ることゝなれば、かれの面積が一五五、六五二方哩で日本の面積及び附属地の一四七五九二方哩よりは八〇六〇哩も広い。それゆえ米国八四十八州から成り立つてある。その一州を占領し

一方黄海の勝利が何んであるかハ問題とするに足りあるも此とは五十歩の兵を流せし得る船舶あるも日本から攻撃する能はざるものなることハ言ふまでもなし

以上ハ一九二〇年（大正十年）米国のウオーター、B、ピッキンが must be fight to Japan の題を著はし此中の一節である、其全体の結論ハ米国ハ日本に対し太平洋の役方に向て攻撃を敢行することハ必敗の基ひなるから、日米間ハいかなる難問題があるとも戦争すべきに論じてゐる、是ハ米人ピッキンが此り論文を著はしたる八十年以前で移民問題が日本の憤怒を惹し戦争の或ハ起んことを期し恐怖の終り称完し此論文の中まハ日本が猶ひと回伝を問ふし猶ひと共と恐るべきハ日本であると指ひた、両国数個の既十五ヶ條の内容を何ものとうるつかん個条もあるが、十年後の今日ハ充行機械が発達し距離を短縮したものし、其他に於ても必ら新しいもの、ピッキンの説も南ドのごとくいふことも出るが、あ正の戦争の無用なることハピッキンの説のごとくなるが、深田博士の日米愚戦論も大体ピッキン日論び、彼論と一左の如く説いてゐる

彼日米戦争ハピッキン氏が論じたごとく防禦側の必勝の筆が、攻撃側の必敗の

運がある。何かうまく日米間の攻撃戦争は何ん
七大平洋のみで、ロッキーの山と戦ふのであるか
らして、人間と戦ふのとちがって、不可抗力自然と
戦ふのである。双方攻撃しうるので防衛はか
りしてゐんで双方共絶対の幕がおりるとい
ふのでいい戦争はいつまでも続きうる。ある
の日米両国の間に何かを共人で攻撃戦争をと
する必要がないらうかで、移民問題がい米
国から開戦する必要があるか。唯だ日本の攻撃
に備へるだけである。北問題で日本が
開戦しない限り、その曲は日本にある。満洲の色
で八日本から開戦する理由はない。北問題

榛原製

で米国が開戦しない限り、その曲は米国にある。かふ
うに両国とも不戦條約の罪人とならぬ譯で
ある。

○早大の応用化学教授小林久平から五枚の
葉子金を頂戴した。卒業研究の漆器であ
るが、氏の説明を借りれば、人造樹脂で思つたもの
と云ふ。委しく云へば不飽和アルマリンとを和し
て油をかけんが斯りすると云ふ。乃ち塗つ
たるものは破壊しうるのが特色であると云ふ。又
外の方は漆器の特徴のものと毫も異なる所
がない、自分の好きな黒色のものであるが

茶碗亀のもあり、赤遠の品質のものもあるとぞ。各
所の花卉の絵のあるのは色漆び書しものなりと
高、値い一枚二十銭位の廉なるものなり、バラリル
の極極などの応用されてみる外いろいろ応用
されてあるとぞ、近ごろ、ベーリランドと云人が
発明したものなり、其名を採り、其をベーリラン
イトと名つけてある、実に驚くべき発明なり、
日本の海外に輸出する安物漆器もいと云んと雖
しかも顔色がよい。

十月廿二日記

○今年は遷都千年大五十年紀念祭列の一ヶ月
の演劇場物数の展覧会と踏んで一覧した演
劇の源流に溯つその沿革を雅楽寮二

部の能楽を説くものが陪列された。此の陪列を機
会に宮内省雅楽寮数組の御
下賜があつたことは弱き光栄とすべきことと信ぜ
ず。
一の演伎とすべきものである。えんの東遊舞
人装束、同歌方装束、舞楽左方装束、舞楽右方装束、
楽右方装束、納曽利舞装束の五組び
ものの装束を多くの附属品があることを待
たない。此の御下賜を始めとして宮内省御所品の数多
く出陳された。楽人法師も嘉人び門の不生の産
業を出陳したびこんまで多つ家と長寿をつこ
とを得たることなどが一番と展開された。実に壮観と
極めて高尚なる楽器に今までの漢びも、其の壮装美、

仮面美、楽器美を見れば、崇高の感を新んさるを得ざる。面子の雄渾の低い時代特徴の推化である。つまり、あの力強い相は今日の子孫手があるも同じとも及ぶべきものと感ずる。種々怪奇の面相は印度その他の習俗を形とつくれたものらしく今の日本人の想像も及ばざるものがあるが、そこに古雅の味がかもしれる。安儀童泰出陣の秦王破陣楽の舞どもを見れば、何人もその雄渾の刻、魔を奪はんアリト叫ばざるを得ざる。諸般楽器等容器に刻する装飾は美術の極致なる事、東洋美術の誇りとすべきものがザラにある。

能楽の新き姿もの各流（観世、寿生、大蔵、和泉、喜多）

榛原製

金剛、福王）の寶什が出陳されたが、斯る場合でなければ見難い逸品である。観世家（観世勧進能の面、喜多家の所蔵山姥の面目次の陳次の面目次の面、金剛家の石橋の童子面、出目次の面）大獅子の面、斯界の有名なものである。楽器類いろいろ面箱のある珍品があつたが、文書類の数の多いこと、見入れば、観世家の世阿弥自筆の松浦之能、北條氏政筆の三井寺の謡本、関東の朱印の観世座支配の文書などが特に目を惹いた。巻表紙の書像石の拓本が珍品があつたが、事大不義の書像石の拓本が特におもしろく思はれた。北の拓本は武陵金氏の聖書の刻と酷似する所多く今日

時の稚の刻書と思はれる、二石共に散樂の図のあるのは珍らしい。

其の序に二三箇所のことを書きつけて見ると東儀陸鐵

猶の遺稿が出てゐた。一は東儀家の系譜で他の一は日本

喜多の史料を主として舞樂能楽の研究まとめた十

七冊八十四冊の手稿で鐵面の歌うたんを始め

いろいろのことが知れる。こんへ南蛮音楽図も綴り寄せ

してあるのだ。いつかやゆっくり拝見したいものである。

あるかとやっぱり時々あると答へた其の名称も数く

えたがそれの陸列する面が乐人の家に助

から幾つも出陳されて胡飲酒面と云

ふのが胡飲酒舞楽に多く出陳されてゐた

榛原製

面の表情が大きくて酒宴らしいものである。

安田義次の不動尊が二三陳列されてゐたが、自作の

面が二個出てゐたのが目に附いた古面を模したのと

あるが、自筆の書の時感じを記した。

久陽守景の舞樂の屏風に根津嘉一郎氏

と笑へたが六曲一双で極彩色も、守景の作中異

彩を放つものと感じた。吉木住寛の貴船の二三点い

黒面大久馬に依て出陳されてゐた。珍しい写真と共

も出てゐたが、蘭陵王面と散手が新も春の日

をしい位住寛の司法官であつたが多方面の趣味家

で日舞楽に造詣も趣味があつたと見える。

○佐久間象山が幽後の老郷里に帰つて来た時、漢方
醫家三浦茱亭と詩の應酬などをやつて起居と
共に、一日相携へて散策中、茱亭は草中の一草
を拾ひ上げて、象山に示し、これは山に在る草であるが、これ
靈藥で極めて效驗のあるものだが、睡菜と名
つけられてゐると教へた。象山は本艸に相當造詣
のあるので、これより耳を傾け、其の効大に方や
用法などを聞いて、話が多く盛つてゐた。詩
が左の長い篇である。此の藥は睡菜と稱せらる
るから睡眠藥と思ふが、詩を說く所の
功能は此の睡眠に効あるのみでなく、胸中の愁
を去り、沈痾を忘れ、真に憂愁を解くとあつて、婦
人が之れを服すれば良く容姿を保つとあるから若
返りの劑ともなるらしい。草名は何んと云ふものか、
知らぬが其の形容も知ることが出来な
い。本艸家と質しなら或は解答を得るも知
れないと、一稿を寄して鑑識本艸に寄せ
んとしてゐる。詩は象山の詩集と異にしてゐるか
も知れぬが自分は物齋の節三交の鈔錄中よ
り得て、此の鈔錄の前冊と照しても違いないが、當
左に再錄する

○夏と秋の移り変りも詩人には美しいこの人間世界である。
蚊の中でも蚊や蠅などの害虫は、実に厭な奴である。
蠅はいるが、蚊は除かれるとして、有形の物は
麻蓆を破る侵伴とされ、其の奏する音楽は
人心を乱す。憂懷を紛翼面を横ひ憂懷
を清め、人の心を爽快ならしむる、亦時として其の
閑寂が人を悲哀に誘ひ至る。光づ無形の中から
湧出でんとすると、雲が夏の空の中に大なる氣象の
である。此の時長い、長い光を放射する日のん
ある。光が天上を充たす、苦暑に伴つて
涼の氣が漲つて暑熱を忘れさせる、形が少さく
優々しく人懷かしくて時る度に心を充ひ入つて来る、

一茶の句に

[illegible]句がある。祝儀振りをする

んぼの天竺の菩提樹」「我袖を乞ひに来る蛍」「手拭

やかぶる山の月」「来る蛍」等一茶の句もあるようである。

ひとりぐ　新涼　まるもさ

と乞ひからさいぐ蛍うるる」とある句がある。蛍の

光ぶのをうたゝ、あちらかしらもこちらからも蛍こい

と呼ぶ、一茶は此光景を写して「あちこちの蚊

にまぎつく蛍かな」とうたつてゐる。太祇が閨怨の

句に「とぶ蛍あんといはんも猶うるる」とあるのへ、

蛍が閨房に光んびきそそも共に賞する人がるへと呼

つたのである、こんな句合に蛍の孫四重さんてゐる。

一茶の流れに蛍の四方があつて、「初蛍都の空へ

きえるいそ」と言ひ聴かせ、「飛ぶ蛍女の髪しつ

なるこのんな」と注意を與へて、戸迷ひの蛍が戸内を

閉ぢこめらんへもあるのを氣毒つて「出よ蛍鉢を

おろすぞ出り蛍」と呼んでゐる。[illegible]

初蛍ちゝ引かへすおんとをよ」逃げて来て淵の思つく

が初蛍」などがれも一茶の[illegible]

[illegible]蛙いとこと[illegible]愛嬌があるので、蛙の俳人と好かんを

の姿態がさまゝゝ言さんてゐる、二三有名な句

を挙ること

藻かくれに溺世をのそく蛙かな

俳諧に時節の取り合せ、蕉門の無いはけれど哀れさが深い。蕉門の句は、ひとりでのびのびと、納涼がてらのスポーツとしてよく工夫されたものだ。吟味の過ぎて疲れてあるばかりでなく、軽妙さはぐくまれて、一茶のは「そんな」と軽からさはぐ蛙をうたふ」とある句がある。蛙のもてあそびこいとも呼ぶ、一茶は此光景を写して「あちこちの蛙にまぎれつく蛙かな」とうたつてゐる。太祇は閑寂の句に「とぶ蛙あんといはんも猶うるさし」とあるのは、蛙が閑寂に飛んでゐるのを共に賞する人がるいと呼かしたのである。こんな句全体は蛙の孤高を重んじてゐる。

一茶の流れに蛙が居て、「初蛙都の空へきけるいそ」と言ひ聴かせ、「飛ぶ蛙女の髪しつるこのんな」と注意を與へ、戸迷ひの蛙が戸内へ閉ぢこめられたのを氣毒がつて「出よ蛙鍋を」と呼んでおろすぞ出よ蛙」と呼んでゐる。蛙は人間のやうに人氣のないが真時雨しの為にあるお茶の師や蟬である。共に有名の句である。蛙の安楽に隠合噂まるいの蛙は「蛙の悪評を傷してゐるが蛙はどこかに愛嬌がある。蛙の姿態がさまざまに言さんとしてゐる、二三有名な句を挙げると

藻かくれに溺れ溺れて蛙かな

其蟬をやがて飽うんを初蛙

つぎ橋の案内顔なる飛ぶ蛙

なつく飛ぶ心は捨てぬ蛙かな

来かゝりて一ト分おのの蛙かな

雲のやうに坐りて鳴く蛙

蟬の鳴む一ツ踊れよ浮く蛙

小雨又は音頭とりの蛙かな

新会と見くて上座なる蛙

叱つても一やくとして居く蛙

鳴き出して大分ひもりかぬ蛙かな

数多花をはつれと眺む蛙かな

停まつたり、或は西行のごとく坐つたり、今別れしもあるめの

標原製

如く蹴蹴（ケリケリ）するが、さて其事前進のみで後退しない所に変むべき所がある。

三伏の暑侯に嫁の鳴くのいとうるさく暑さを増すかん

も思いやるしが、茗荷に流れに蟬を落りて夏の暑をよ

く忘れてゐる

開けとやや岩さし入る際の蟬

宮実の絶詞といこんな句をえのびあらう

蟬に死なるときしまふとや蝉のから

やがても死ぬけきるこえと入る際の蟬

こんも芭蕉の有名の句とが、宮実のあれ無言の表

が宮さんも無言の表がある

秋の日が漸やく近ついもくさと、名蟬もそんとなく短日を促

其夕をやがて飽うんな初蛙
つぎ橋の案内顔なる飛ぶ蛙
なるべく飛ぶ心は捨てぬ蛙かな
来かゝりて一ト合おのの蛙かな
雨のやうに降るなく蛙
夕の夕べ一ツ踊れよ浮く蛙
世の中の何なるものを井戸の蛙と云ひけし蛙
八月閑なれど哀れなるものあり。初めて夕べを見する時こそ人は珍らしかるが、すぐに飽かれ易く繁くしいのびすぐる飽かれる。あの出の多るき方ハチヤプリロンよりしくじ、つゝ歩くことをもず、時々人の前こそ立つて俳まつたり、或ハ西行のゝくゝ坐つたり、公別でもあるあの

榛原製

如く蹲踞したりするが、さても其前進のみむ後退しない所に座むべき所がある。
三伏の暑侵れ嫁の居るくうちうくゝ暑さを博すかんも思いるしが、茗荷に流れ懸を落りて夏暑をよく宮ゝてゆく
閑けさや岩にしみ入る蝉の声
宮実の絶詞といふこんな句を云ひのびあらう
夕べ見るなきゝまふそや蝉のから
やがても死ぬけしきは見えぬ蝉の声
こんも芭蕉の有名の句とか、宮実さんの句とか、宮実さんの句とか、無言の表
秋の日の漸やく迫ついてくること、宮実もそんとうく短日を促

すかんぐやうに感もらさい一茶の句に
つまる日を蚊もキイツチヨ〳〵
アブ〳〵式に刺されも日がある　短かくもあり行く越かあ
る
秋の森の音は夏の霧ふるも一段清涼の氣を深ゝて
七味感を覚へる一茶の
涼風や力一杯きり〳〵す
桐葉の白の
更る庭や世を離れ霧の影
ちるは一瓣行人も一瓣の涼味を感する
秋の蝶はめ母し力弱きを誰やらの句に
秋の條ころび養ていふ又時め

一茶はどの句も日清がある
悠くの表別て悲の星にさく
と、高く線のを引人へん出しを慰め又
我死すば夢寄とうんきり〳〵す
と云ふて愛情を寄せてゐる、古蓮も風にやうに枝
を揺て情を寄せ
松葉よ美人の髪と蔵て哀なる
云ふてゐる。
全体鶴は雌雄共に黒を基とするが、雄雌
が雌を誘ふ為めの鳴び声を張つて、悲を語ささめ
きつゝあると云はれてゐる。鳴る田清の影が人を感
動を與へるのも面白い。蟲類の中に蛍

妬の激しいのもあつて、參斯（キリ）とかい、雄雄中らく（おそ）
でみる所く、他の雄雄が這入つて邪魔をすること、例の
後股に傷のあるギザくで一劃しまると云つたのである。兎角
二口の世界は、首領の人間が大の島者の樹を敵として
衰んを侵すのも四尤も千萬の事に、抱一上人の句に、「嘉
慶」み、樹無きい時美しき」とある。雄鹿を殺した
うの上書いたもの。であらう。

○書架の或る部分を塞いでゐる、大小絵をうきアんバ
ムを敵後の前島谷の故郷へ送ける郵便物に寄物と決し送る為に出すうちに作る来歴（抄）
は約百冊あるが内、寄物と考へたのの大（四一頁三二
枚入つて）二十七冊 小（一頁一枚入つて）三十二冊

合計六十三冊である。家に留まることうしたのが大小
約三十冊ほどあるの北芽を通（えが）と葉書の数へ
優れを為枚にあらうと。（ほど）三十年来保
存水郵の報を世界の比べ云へるのは、貴方が保存
した数は、人から郵便で寄せて来たのも勿論ありく
まへが、自分が旅先から出したのも皆保存してあるの
やまの郵便に寄送したいろいろ（たこぶき）の（絵葉書）の
のよい為めの標をすると保存したのも少からずある。
但分が待をときき島の絵味を感じたのは、洋行
りの友人がいろくのお国の絵をときを持ち帰り来
されたのは初めて長き中村進午（玉の新大学
池田龍一郎の法学の授業とこうとこふべき

び、屋敷の形象や義務や波及するところも也筑味があり、
て自然に感化を受ければ。殆今一下頃い俗をのぞき
が流行して、さまざまの云説を撒きらし、只今こ
戦争のあるこれ、こともあるが、新年の元旦ならば
年賀のはがきに絵をみて、を撒しとのむ俗
まるとあるもあつれ。何等うの紀念の為めに心
えうきも相面工夫を凝し、あるもあつれ。自今を
絵葉書と自からの工風で俗をうきを考しれこと
は無つれが、俗布まる人数る注意しれる一時の
興味のえうきを考きうる実の也集めれことから、
ある時は社員人と紀念俗をとうきを実のを考れ歌や
署名を活のれことまである。日露戦役の時なども

榛原製

えんることまれもやつれ。外国人の出うれれ折うを
いつも到る先くから俗えのきの消息を得れいと依頼
し、高田博士なども筆無性に似ず多忙送つてくれ
れのが百枚紙もあつを一冊と装宜さんを作る。家族
が芝を見物る出うれ俗のうを来る到の様かき
を賜ひ来るべきを命じ二百枚ばかりの一帳とうつ
てある。今は俗えのきれ表面を撒きることも寡つて
市中の店頭にこれることの流動俗優のえのきの
のが幅を利かせるが、四月頃まで高砂の異
つれ新版があると今でも賜ひ来つてアルバムの収めを
ある。この頃百帳の俗をのきを展観すると、早やく
無用とうを興味のあることが追々と天凡化

して各地の風景などが十の八九を占めてゐる。そが母
遠り別けて或許が家に留まることとなり此の八年く
は外国のはかきと特に自分の絶念となる母のことを
どでありて、地等のこまく自分の現後寧ろ早大の図
書館あたりに保存すべきことと思ふのである。三十
或年間に発行された俗謡の流
華史の材料となるべきものであるから、折角保存し
たものを紙屑として棄てるのは忍びず、幸にも
前島氏の俗物録に自分が保存してあつた自分
のものを六十或冊のものを保存し且つ研究に
も利用して呉れゝば自分の本懐であるのである之れを
等祈りまつる一切の事である　十月廿五日記

標原製

○亡友山田黄南（喜之助）は余が長崎の獄に在りし時
差入の洋書の一冊を贈られたことがある
から、その人柄と黄南の詩文とを書いた獄中の
を得た、黄南が獄と繋がれたことは自分の記憶
の無いが、其時は左のようであつた
差入の我国の報酬獄中多時集
無酒無茶無一物幽窓只見月圓
獄中美人　黄南生
黄南が獄中の苦を切にしてゐると茶がついたら獄
中談をやつてゐるべきものであつたのに、遺憾とするに
足る事と上つた亡友を思ふ。
○世界の重要問題　いろ〳〵思ひ付くまゝに漫々書

きつく

○事を次つて来を知すと云へば支那の古るい外交は、日本の被害れ蹂躙東半島に三国が干渉を入れ之を附やしめたのハその一例だ

○若しの刻が来を制し此、今の様な来が刻を制する、征清が四の事木産業革命の結果である、

○征清的ボイコットハ清の商業を用ひるいかゝ〜く戦争である

○支那の脳髄こゝに加入してあるが獨立国である実を云へバ加盟の資格が無い。九ケ国條約ハ支那の獨立国で無いことを主張するものである

○満洲ハ日露の後庭 日露の戦役と露帝は

バ四かゝ露の者とするん 日本勝つて其の戦果を擁護すること何人の不可かある、

○満洲ハアルサスロレンヌ 喻ふるを得べし

○支那ハ日露戦役と満洲を放棄して日露の驕慢の餌の任かを七甲主を宣し。もと為て北城次郎の国土で支那が国的と思つてゐた所である。

○日清日露の戦役と結て満洲が日本の占拠する所となつたる戦勝市民の帰結である、

今更我国の顔する満洲へ来るのハ

○日露戦争で日本の手の伸ハた青島を支那に返しやの比結果ハどうなつたか、実に哀んな有様でハなつたか、

○支那の安全地帯も政治らしいものある所も時支那の実程あるあるも[illegible]上海と云ひ満洲と云ひ文化のあるのい他国のお蔭である。支那の何故之んこと学ばうとのであるか

○支那が統一を缺き文化と進まういのに国が大きくるから此、亡国の程の原因があるが国の大きくるも亡国の一原因である

○ナポレオンは独乙人をうつて独乙を征服し伊太利人を以つて伊太利を征服した。国内こ和合を欠くと国い斯く亡びる

○印度の四億弟の上を有する大国が、四階級の闘争があるも国の統一がるへ、英吉が十三億人

○の数を以つて為ち所以である

○支那こ竟舞時代から統一がない。唯此国民の自治の制度があるのに、まんで保つてある。国民い政府の軟ようつあるのい。術租い政府こ誅求の蚤しもあるが実い美の干渉除の為此と支那通い実つにことも事もある

○支那の今日い軍閥割據で、支那も統轄する主権がなへ、国際法制を為さんとすると、誰れを相手にしたらよいか美すら分からん。日本が維新の際薩長土肥が各々割據したら、下分今の支那の如くであつたらう。

○支那が自力で日本の如く文化の新運を開くこ

それ容易でない、或はそれを鶴待するは百年河清を待つと一般かも知れない。寧ろ民俗自決で部分的に発展する方が支那の幸であらう

○満洲国家の独立も民俗自決である、日本の生命線に此国家が新建されたから、日本が之れを援護するは言ふまでもない。況んや素から主流を国家とする範を支那に置くとは相違ない、今これは実の支那の仕合である。

○或は云く満洲新国家の組織は中華民国より背する叛逆であると、何んぞ知らん、満洲は中華民国の領土内に含まれるとのことことは義和団事件の時露西亜が其機に乗じて満洲を横領せんとしたのを英国が反対して支那領土保全の約束を提へ独元来それに從つて英国から独乙と交渉をすると独乙は答へて満洲は支那領土の内に含まれずと断つたことがあるではないか

○土耳其領土保全の條約に就て、土耳其国有の領土の外は「セルビヤでもブルガリヤでもルーマニヤでも希臘でも埃及でもポロく土耳其の羈絆を脱して離れても、列国は

素知らぬ顔で承認しようとしているのか、乃ち土耳古領土保全は其の国民の領土をさ〜えようとのことである

と言うことが知れるのと同じことで、満洲は支那自身も放棄した住で、其の領土と見なすべきものでない。

○時運こうして解心力の行はるゝ人自然の数である、満洲国家の獨立を機として西北も今は獨立運動を起つてあり、彼の蒙古の支那領土は獨立と放任することが寧ろ支那の仕合である

○支那の軍閥内江は昨今益々甚しいものがあつて混沌を極めてゐる、政府へ外ら空政の人は我

標原製

へと南京に居るものゝ三ツ巴混乱と乗じて増長する共産党である、赤匪賊である、北等は皆支那を弱するものである、延て列国も新興するものであるが、今の事実は増大と発生するのもきっかけ勢力で、いつも繁殖の大乱が起らんとする限りである危険を孕んでゐる

○機運一日も千戈を絶たない北の危険を見て国際聯盟の何れも感じ此の対応策と為るか、土台斯る国土を脳内の正義として共ることは抑々誤つてゐる、リットンの報告の誤りは日支を同じ位地に置て取扱つてゐる所の根本的の誤りがあるのだ、

標原製

リットン報告書に完膚なき反駁を加ふ

堂々百卅ページに渡り詳論

帝國政府の意見書概

リットン報告書に對する帝國政府の意見書は一日の定例閣議において内田外相より詳細なる說明があつたが右意見書は『一九三一年十二月十日の理事會決議に依り任命せられたる調査委員會報告書に對する意見書』と題しタイプライター刷二十字詰十行百卅三ページより成りその内容は緒論以下左の五章より構成されてゐる

緒論、第一章　支那、第二章　滿洲、第三章　九月十八日事件及びその後の軍事行動、第四章　新國家、第五章　結論

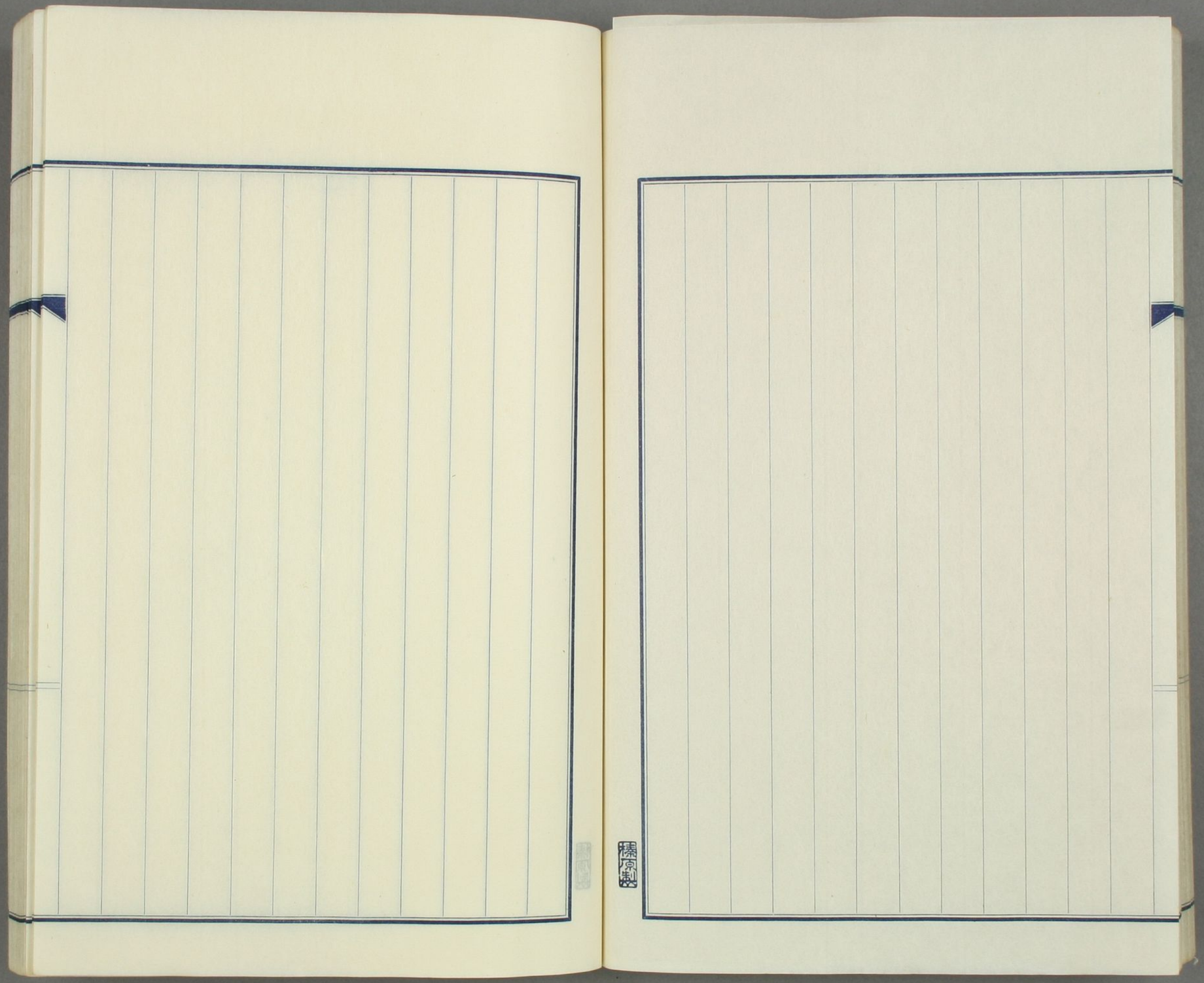
然してその全文は帝國政府が國際聯盟理事會に提出すると同時に公表せらるゝことゝなつてゐる故、それまでは嚴秘に付せられてゐる、その内容は報告書の原則及び提議を全部反駁してゐるもので概要は左の如きものであると

まづ支那の特異なる國情を述べその結果外國人の生命財産の安全なき事實を示し、ために列强の繼續的干渉政策を生み就中我國が特に被害を受けたる歷史を述べると共に日本の滿洲における特殊地位を强調し、日本は滿洲國の承認及びその眞實なる發達を助成せんとするための國際的協力が現實の事態に適應し極東の平和を持來すべき唯一の解決方法と思考するものにして、假に他國が同一の地位に置かるゝも同一の結論に到達したるべしとて議定書を締結するに至りたる所以を述べ既に成立し着々堅實なる發達を遂げつゝある新國家を瓦解せしめる事が眞に現實の事態に適應せる方法なりとは如何なる觀よりも想像することを得ず とて「リットン報告書中の諸提議が今日迄しつゝある事態に對し如何に擴張し適用せらるべきかを決定することは世界平和の至高なる利益のために理事會の職能なるべし」とリットン報告書中にあるを援用して日本政府としては第九章中の十原則はその性質上詳細に論議するの必要なしとする立場をとるも、第一原則に日支兩國の利益のみを述べて滿洲國の利益を考慮に入れざるは事實に即せざるものなりとし、第五乃至第八原則は日滿議定書の締結により自然消滅となれること、殊に最初の九原則は支那に强固なる中央政府なくしては實際に適用し得べきもの に非ず、國際協力は望ましきも强固なる中央政府がこれによつて直に實現すべしとの保證なかるべく、日本は滿洲問題解決のためにかくの如き會にならざる事態の出現を便々として待つ事能はず、第十章の若干の具體的提議に對しては報告書自身「國際政府に直接に勸告を提出することは本委員會の職能に非ず」と自ら自家撞着を示せる如く、單なる說明則實現の一方法を例示せるに過ぎないからこれを論駁する必要なしとの立場をとつてゐるが特に左の點を力說してゐる

一、十章中の諸提議は事實上假裝せる滿洲の國際管理にして滿洲國の容認せざるべきはもち論日本としても受諾し得べきものに非ず

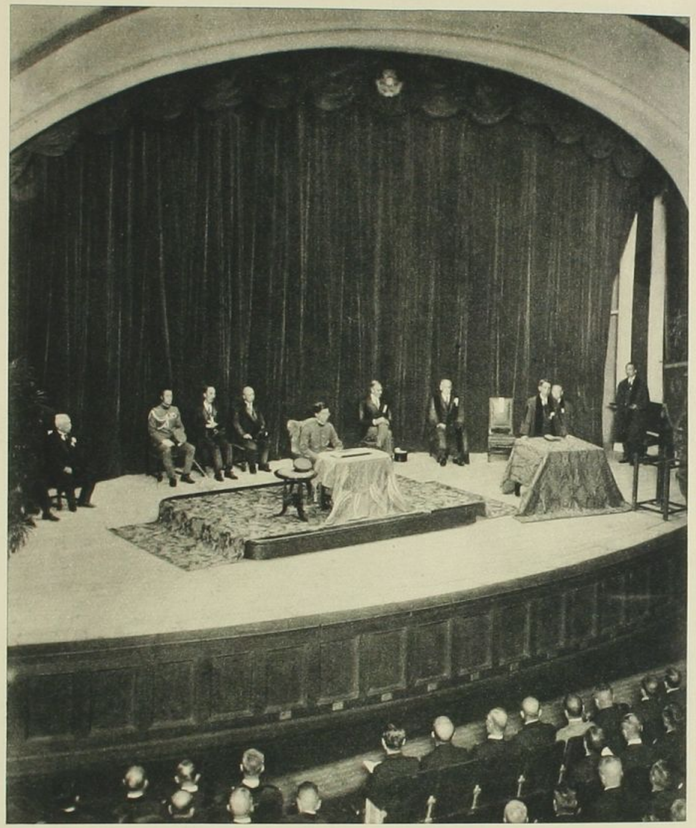
二、諸提議は少くとも紛爭當事國が共に强固かつ信賴し得べき中央政府を有することを要件とすべきものにして、これを滿洲問題に適用せんとする事は紛糾を一層混亂せしむるものである

三、滿洲の軍備を撤退し特別の國際憲兵隊のみに依り同地方の平和と秩序とを維持せんとする提議は現實の事態に全然適合せずこれは日本がもつとも避けん事を希望する該地方の不安と混亂とを醸成するものにして、委員會自ら非とせる『原狀回復』よりも更に事態を惡化するの恐ある點において極めて不滿足なり



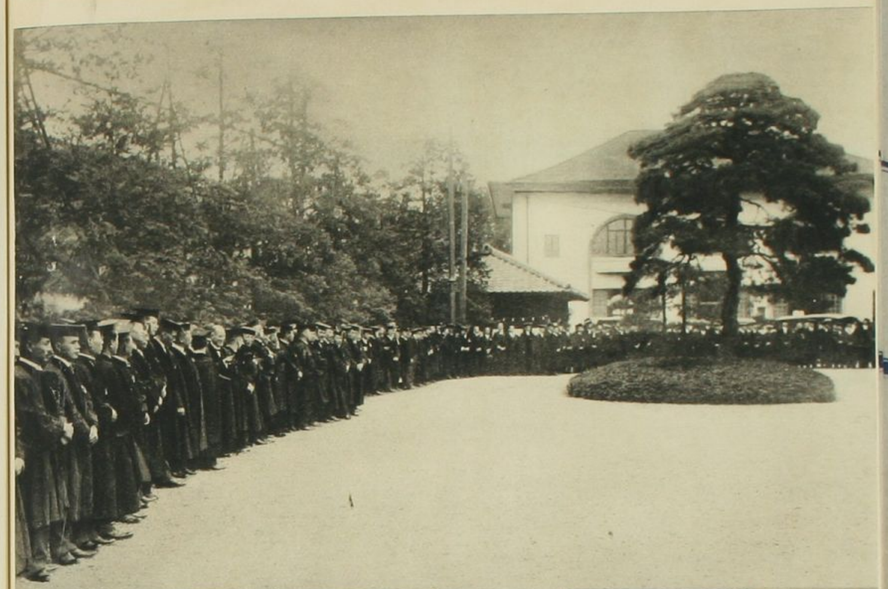
以下
4丁
白紙

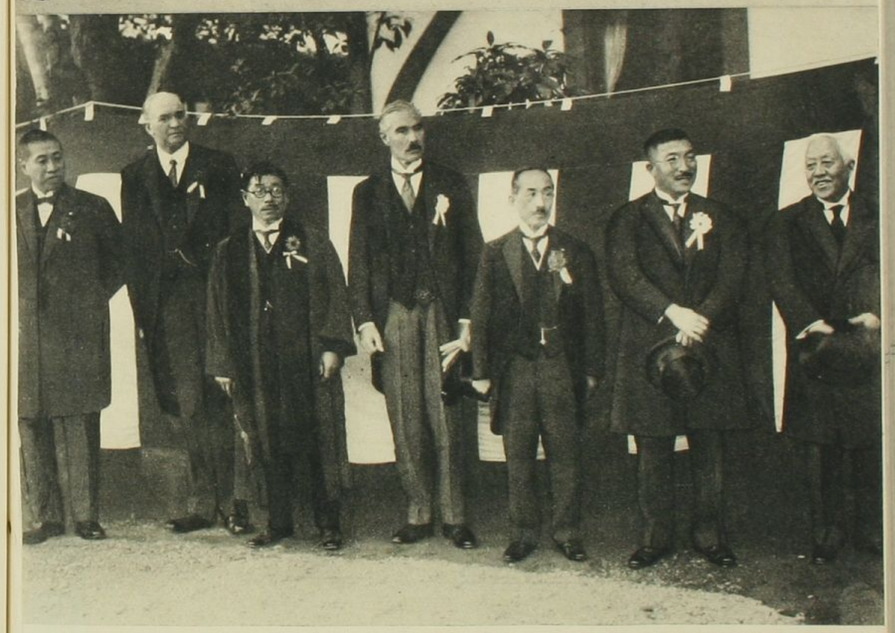
榛原製



早稲田大學創立五十周年記念式

中校庭に建てられた故大隈老侯早稲田先生の銅像





（上）御差遣宮殿下を奉迎す　（下）員職教るす迎奉を下殿宮遣差御
使公典瑞・使大國米並臣大諸外相首藤齋るす迎奉

品物配達はなし

又仙子

明治は二十八年比まで有つたとおもふ、東京市中に、三鱗といふ小荷物配達所があつたものです。市内交通の重なところに三鱗を赤く印して小荷物配達所の板看版を掛けあつた。鳥渡、昨宵、知合の處から下駄雨傘を借り來たのを返すとて、其品を紙包みになして屆先を記し、配達所へ持て行く、一品貳錢だつたかと覺ゆ屆けて呉るので、嵩張つた物だと目方と大さにより料金を拂はせられたやうに覺て居る。

現代のやうに四通八達の便利なく、郵便の配達物も範圍が隘かつた爲め、此三鱗は殊の外調寶だつたものです。トコロが此三鱗の出來ぬ前代には、余が十六七歳の頃、市内に雨傘の貸借仲間があつて、之が會員組織になりあり。假に淺草へ行き、俄雨に降られたとすると豫め會員居所が解りたる事とて。仲見世の何屋は會員により、飛込んで會員證を示すと、直ちに傘を貸與された、底で濡ずと歸れる。サテ其傘を返す段になると、先の貸主迄ついでを以て屆けねばならぬのだ。之が至て手數ではあれど一時の仕合を得たものとて。後の勞は苦情を云へぬ定規である。

昔の人は其處に正直なところがあつて、借放しにした上、家の者の指領（サシリヤウ）に失敬してしまうといふ横着氣はなかつたものだが世の進むに隨ひ、段々と横着氣が東西南北の借手に殖えてか、何時となく貸傘會員制度がおヂヤンになつてしまうた。

モツと其昔は一心講の誠心講のと、街道驛路の旅籠屋に組合があつて。假令ば一心講の連名帳をかいて次の名指の旅籠へ着くとする。前の旅籠で雨具の不用意な旅客は何程かの損料賃を拂へば簑雨笠のやうな物でも親切に貸して呉る。次に着いた旅籠へ其儘置捨て出發が出來、引替に損料賃を戻されるのみか返す世話がいらぬのだ。是等旅籠屋の制度に連絡が取れて居るので至極便利なものである。

殊に伊勢路などは、彼の伊勢子正直と自負するだけ有つて、前の旅籠屋で病氣になり財布の空なを打明ると。次の旅籠屋へチヤンと添狀をして病客路頭に迷はぬやうにしたものだつたとは、彼地の年老から聞いた咄だ。

右様の咄は今日に於て馬鹿氣切て、只笑の沙汰に終るのみだが。爰に頗ふる振つた、飛脚屋の云立て告條がある。何時の時代か恐らく實際に遣つたものでは無からうか、マアお笑草に記してみませう。

ゑんきん
飛脚大安行
かち荷もち

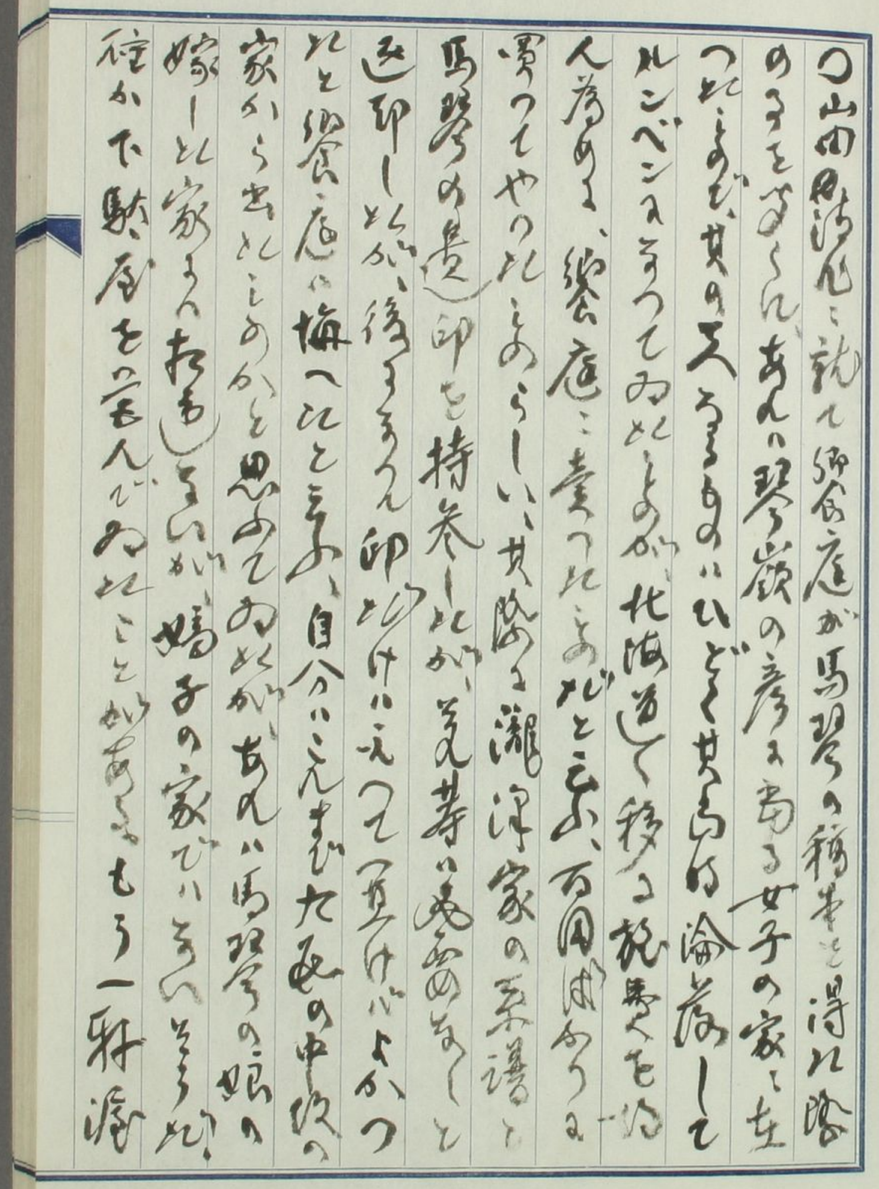
今般、新たに看版を出しまして、遠近歩行荷物とは、現金掛直無の故事附にて、急な御用におやとひなされますれは、我等が足の早き事、豆腐屋の朝食をあざむき、大丸屋の火燈（ヒトモシ）頃をあやまらす、たとへ韋駄天様が虎に乘て、欠落をなされても、減太に負は致しませぬ、拙者が奔るを御覽あらば、羽根がナアあるる、羽根がナアハヱ四足が有かと、お疑いのくらい、元商賣が飛脚だけ、おあしのほしいがやまひにて、飛脚日雇（ヒヤフ）のやまひより、賃よりつらひものはなし、唯大津はゝきの山々も、おかげを冠る三度笠、草鞋ばきにて、はゞかりながら、二重の三尺手拭も、ひとへに願ひあげ、たてまつります。

配達につきモウ一つお咄をしたいのは、往時の甲府飛脚の事である。余が親達から聽いたのには、甲府と云所は旗本侍の始末におへぬ者その他直參格の輩に、今いふ不良性であつた或向の者をも、甲府詰として一種紀明所分に行はれ、容易に江戸出這入のならぬ事なそうで、甲府飛脚といふのに托す、此所で飛脚は矢釜敷侍分の用達金を取扱ふだけ、特別の注意をなし確かとの金銀を送り遣るとて、甲府詰とされると自然棄鉢になり氣も暴きに染ると云ことだ。其處へ江戸の身寄關係より生活補助屆け方の全きを期するものである。然るに此街道は小佛笹子の險阻あるばかりか、驛々の荒凉、頗る淋しい往來なので通常の旅客でさへ不測の災害を被ふる稀れでなかつた。況して少し重氣な懐中らしいと見込まれたら、決して安穩に過ごされなんだ

とか、斯の如く物騒な中を、甲府飛脚は大金を抱いて、おのが任務を盡さねばならぬので、充分な用心をした。原來が腕前の相當に出來た上に、第一度胸も能くあらねばならなかつた。途中追剝や山賊の現はれる所は、豫期されてあるので、是又腕前達者な荷持と稱ふる伴を連れる事もあるとやら。兎に角、飛脚其者は他を凌く腕節を以て任を果したものだそうな。實に警備のなき甲州街道には、此飛脚の有功は宜しく賛すべき者であつた。添ていふ、件の山賊追剝共には、甲府詰にされた不良者が慾の上と面白半分その緑林中間になつた者も有つたらう。此甲府飛脚につき、左の付句がある。

預りし利も添て置く講の金
甲府飛脚の減多には來す

是は安政付合集といふ俳書にある。前句の講の金といふのには其頃何方の驛々にも一心講、眞誠講、また何々講といふ看板を旅籠屋の表に皆懸けてあつた。假に旅客が甲府へ赴くとして八王子驛の一心講の旅籠屋へ一宿する翌朝出發の際、旅籠屋から定宿帳を呉れ當旅籠屋の印を捺し、サテ次の中食、宿り驛の同し講中の旅籠屋へと案内の言葉を必らず添て出發を壽ぶくものだ。旅客は其便に從ひ次々の驛舍に夜泊なす。即ち宿り〳〵は一心講中をたどるとする。更に又眞誠講にても其の如くである。ソコで本文の講の金は驛に連絡ある組合に年番ありて積立に講金を預り期限來りて次の年番に引渡す場合、預り期間の利分を拂ふために、利も添へて整へるものを、此慥かな甲府飛脚へ托せんと待つところの句柄と見らるべしだ。餘り古くもなき甲府飛脚の沙汰、お耳うるさき事にもあらうか。



美と云ふ馬琴の縁家があるそこでいくらか馬琴の遺書があつて、昨年頃まで刻したことのあるのを思ひ出す。山田の話では馬琴の遺書を手に入れる前に柳亭種彦の玉石の書を考へる事に成たことがあつたとか、えらい書物だと丁寧に拝め、抽斗からいろ〳〵自筆本が這出してゐた。僅かに二十回計りの稿で、袋庵はひとり悲しかつたが、先の家に少々あるつもりだと云ふ。出来ず買ひ得ようとして残念がつたと云ふ話を聞いた。

或る時代の馬琴が故下を自分び者いに、えらい何ごとと山田と受け合ひ「園の雪」と云ふ五冊の淡本がえらい

横原製

と初めてだつた。馬琴は一時小説を例つて生業として生活したとある。例の鼠の大の愛好家でいつも小さいやつを夕モトに入れて(注)おき時々玩ぶと云ふ事実は誤りだと云ふ。馬琴の書を篠斎黙老他が批評し馬琴がえんと考へたのが大考証記として刻されもあるが、えらい冊数の三冊であることを知つた。自分の見たのは宮内で就て、あつたが、此等批評と考えを一括した早稲田文学と劇セたことがあるそうだ。えらいことは既に全部書れてゐて、山田から少々へも漸やく記憶を呼び起した。

○フランスは流石に葡萄酒の国だけあつて、今日でも何人としても北酒が無ければならぬ北酒がつきものである

伊えんすき懐れうい炭之丈生そびいが今の■を注文の■まと■酒
が光らす附属まま、注文のものあと抑あのい困ると集をもむの
い笑が)ることび、日本のもらすと茶が深いると同じことび、生ハル
らく親人ひも弟あうい光らす葡萄酒を深くて持参す
る家族がらす時親人の出先、弟あを宵)お持ちるを必
らす北酒を深くることを決して意んうい。日本ひい数の家
のるまるてあるかあの国ひい蕎麦日除びひとくあいも
のがあか

○一茶の集を読んで今の句をたこ抑す

ことしからまるまうけそよけさの春
うる針のやうな手足を秋の風
い一下家不お居のすくけそ
おぼろ〳〵踏めいみるう逆ひる

米時も罪ぞよ鶏が蹴合あぞよ
芋の葉波を苔さく伏すが秋の雲
楽くと蔭を咲きにけり名ちて菊
人ひこ植うんハ曲る庭菊うる
咲く花も節をつけとく世の中い
世の中い咲く中蔭さくる上手下手
時い蔭のつんいどうーにきりくす
小菊ろう縄目の野ハるうぞし
移蔭よ移もゆるあ上手物のくる
今の世や山の栗る夜蕎麦屋
鬼灯の口つきを姉の指南うる
鬼灯を膝のか猫んとのんぬ

○一茶の句集を多く翻讀して見るが武田淡人氏
飽きることが無い。どの句にも情味があり深味
のある自然のあの人の文章にも情味が漲
つてゐて、尤文を書き慣れた者の紀文や、小説を失つた
しみの紀文などい流暢なるくせとても讀めぬ、貝合を
なる書簡の記を書きする。小品文や手紙などで、
書がないものが少かくすぐれてゐる。俳書の詞書の
の方も愛するものが、往年、巻莫迦と言さたも
五十嵐力博士と宮崎とも、俳士と田
園流味の人で自耕を主とし
もあるところであるが、俗者の文は往々枯淡と共
き趣があるが、一茶のもとがとを

標原製

ふ時きは文飾を尤かんるのか一茶はいつも赤裸々で
ある、あんなと一家をなしてゐる、中も街ふ氣の微
妙なもの。あの人の文は句と同じくどんなにも氣
持よく讀める。手紙なども情意共に別の者
うまいものである。一二を引いて見ると
いつもやはり、夜をこめて霧のそこら辺をはなれて
徳見舞の深志あるかなくと、一口にのみ
りなくり口上ちくちく、里中の古井、もとの心
をなる人ぞ汲もと、心に種ゆ中い、共上何ら
の徳みやげ、是又高んがらく茶を飲て、将れ
徳物りの頃は、年徳の前日なりは、のしこし
山のあなたまで、別れ泥とるんとるあなたの

ど、あんころの御はかせ御見舞被成下候ハ
私も年内に御見舞かたてら参上とぞんじ
ど、甚弱り候と見へて、足なえ申し候ハ古河ら参
り候ハ、はいりて二、三日休み、はくくと断くれ申
度候、一昨日七種頃ハ、御祝儀ようしかん
とうあり、まんまん、御あ清御男年一の
ようあり、一ハ帝様ハ、ようなかしく

十二月八日　一茶

春商様
梅中様
高橋様
雪士様

うまいこのかいようかうとう
ある。次ハ礼状一通を稿する
扨と去歴番の間、浅うあ御あ甘い、粉ようを
存ず、と計り、一ト口ようの中雖く、朝ようあ、御
顧見かけ候得ハ行廻り、春り候て、耳房に
降のつきまとふ、うるさく思ひしやしう
えと生ようようとも少分の孫ようん心早
魃の為と等しく、便りに思ふ、ハも乾きて、
取付くべき岩陰なく、持て回身の上ようを
御仁恵の御為ハ、稀と雨の芽の生り蘇り
なる心地して、又こ世ようと長くようも、偏くハ冬を終
の御陰、行末を助け給へ、あの仏と陰ス

かうまゐり、御禮といふも、人がしらぬ事にて得たり。
只やみちうんも本来霊はかの中上なり、今
夜話主　の中うんど、片隅の灯かげんうて
しかしめ侯得バ、吃の舌の分り雪四べく許
しかくかーこ
こんハ師走四日　可好大人死の名者也、真作の品る
被牧ハこのやうのものなるべし。花牧ハ
きまくひまのいろい、うんうどい美上業のものと云
あべきと
一茶の発文の中と　おもしろい　あがめるべきもの。その中
に俳句と思ハるものの左の一文ハ
去年の夏朱植うゑの時、蔓き節しけき浮世の生ん

榛原製

なる娘、愚かなれど、ものん聘かなとて、名をさとと呼ぶ。今
年誕生日祝おころはひとて、てうちくあいい天宝を
くふうく振うちて、同じ子供の風車とおもふを
持てるを、切りに欲しがりもむづかんと、みんとらをけるを
やかもむしやくしやぶつて捨て、霞ちの蔵ちて
直におのものに心うつり、そこらなる茶碗を打破
りて、笑ひ直ち侯、障子の蔦紙をめりくむし
るを、よくしくとはちんぶ減と思ひきやらくと云天公
ひとりもむしりの。心の内一路の春もうく、名月のきら
くしく清く見ちんが来ちき俳優るやうに、なかく心
の鏡を伸ハしめ、又人の来りて、わんくハ何をもうとい一心
犬を抱さし、かくくはと四角くい、るる抱さまさる。口許う

ら爪先まで愛嬌こぼれて愛くるしく、いはじ寺の初参り
胡蝶の戯るるやうもやさしくうつくしう見えける。此のおさな
仏の守りしなまひけん、遠夜の参り、特仏堂に燈明
して、輪うちゆらゆらとしたるも、いとかはゆしく、ひとり
早蕨のいとけなき手を合せ、なんむくと唱ふ声、しほら
しく、床しく、なつかしく殊勝なり、美こつけても、おのれ
歩れはいくらの雪を載き、顔はかしばく涙の玉の如
る齢にして、陽炎の如くうかく月日を過す
こと、二ツ子の手前も恥かしはんと思ひ、世産を退け
ばはや地獄の種を蒔くなり、隣と辟る蝿も憎み、隣をめぐ
る蚊を誹りつて、あまつさへ仏の戒めに酒を飲む（一茶自
注是より見れつけてまも子供の様）折から門に月さ

していと涼しく、外に童べの踊の影のまんじ巴ちらが枕
投げ捨て、片いざりにいざり出て、影を掲げ手真似して姫
しけるを見るにつけて、いつしか彼をも振分髪の乙女
になりて、踊ちらを見ばやなんと、二十五菩薩の来迎よりも、
遥かまさりて異なるわざちらんと、わが身のつもる老を忘
れて、裏さを伝んはらしけるが、かく日すがら、男衆の前
の束の間さ、手足を動かさずといふ事もなく、ねむ（む投
んるものから、朝の日の昇るまで眠る。そのうちはかり、毋
ハ月と見ひ、飯炊きそこら掃き片付けも、田畑とう
く汗をさまして、倒れ注ぎ寝るを歌の美もる枕屏と
定め、手かしこく抱き起こしも、裏の畠と庭やりも、乳房
あらがへばすはく吸ひるるう、胸板の女なりと打ち

如きもしこく笑ひ顔をつくるに、母は長と脳の苦しみも、
日々襁褓の穢くさきもいとはずあんを、衣のうらの玉と得
るやうに撫でさすれば、一入喜ぶ有様なりけらし

蛍の迹　数くさうに涙乾かる　一茶

、、、　、、、

世の中の憂き悲しみ起る心浮世の憂ひ苦しみ
もよへるうさぎ千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる乳
どり子を、病母に負の押し来るあきあらしくしき疱の
神に見せまゐらせつゝ、いまだ朧のさながらなんぬやとら咲け
る初花の、塵泥あらしの苦しく別こそ見る目さ
へ苦しけれ。こんな二三の症状なんぬ疱かせく
ちうて、舌解の峠上のまろく成るやうに、瘡蓋といふの

樣原製

取のべ、祝ひ雛にも、さん俳諧のといふ作りも、母湯浴ひ
せる真似かりも、神の送り出しなんどまるく結ぶも、
きのふ〻〻ちい鞠の少なく終に六月二十日の朝顔
の花と共に死世をしぼみぬ、母の死顔をすがたよりく
と泣くもあべるうらぶの物ごとの行く末の再び悔
らむ、数多の花の精に戻らぬ梅ひごとに、あきらめ顔しも
思ひきりかねきん思義のきづなこりけり「霞の世に家の世の
の俗と一茶の句集を渡り左の数首を得たり、前段の
「詩」の句こゝにきる句の迹くさるもとんまも神ぶる

（陸）

徒ぶとして山を見る雄の分

土手やうの江にを眺める雉子
小蛙もなくとうの口を持つなを
ゲくんの雉子の何をを思ふ柴橋
北つ国ともしやくとしも鳴く雉
散る花をはつかと眺む雉子
度も雉子なけるる一茶こうの行
小雨ぬれ音頭とのりの雉かな
鳴き出しも五分もりかめ雉子
就合と見えを上府にるく雉

[illegible]茶の和を書きつく前に鳴く生命と詩」の内巻
[illegible]

（巻）手紙やゆ言いあてる来る巻

福助振りをすれば天宮に巻る
入れの鏡をつき出す巻る
呼鈴の待合にとぶ巻る
逃げて来て潜る恵つくふ初巻
我袖を親とれのちの巡巻
大巻ゆらりくとるてゆり
初巻其手ハ必ハぬくとや
もう一つの川を紙えとふ巻
呼鈴の待合に到ぶ巻る
花主の巻れかるる巻る
初巻ちて引かくすあんどもそよ
鼓いの一の巻ちもの巻る

○来月馬琴と就て一席語ることゝなつたのでいろ〳〵あれこれ
れ往来河邨瑞軒一事を思ひ出した。それは馬琴が八犬傳や
近島記などに就て諸家の批評と得たことがある。亦批評
を一々挙くることがある。馬琴の著書の愛読者の中
には當時有名な識のある人もあつた。讃岐の大夫木村
黙老氏の、伊藤の京屋殿村篠舎などは其尤なる者
であつた。今日では如何に説く事か知らぬが、盛んに批評
することが行はれてゐた。馬琴當時の批評は、批評はき
ど行はれることゝつた。貴命を奉じて馬琴が批評を受けも
さえも其一部を反駁したことが始めてゐるはずの分と思
ふ。亦の多の批評者に答を者三者が賛成することを興かつ
たものもこれを始まるかれ思ふ、批評の反駁は當時盛

榛原製

さもあれば、大変評判記と称する横とじの板本は何用に
なかなからまいが貴かい一冊所持したこともある。勿論北涯の
批評は今の批評のやり方とは全然違つてゐることは言ふを
待たない。黙老氏は篠舎の弟子。馬琴の恰好者である
から、褒める方が多く駁する方は極めて少ないつた。駁する
と云ふも疑義を挿んで著者の教を乞ふと云ふ位な
ことであつた。馬琴は一々答へたと云ふ事も
人を横れ、自分の思想のある所、聊も隠微の間も洩し
てゐるのも、細かに説いた。北の一段は後篇の伏線だとか北
一篇の前の段と照應するとか句合は得意がその答
の内のあちこちにもある。斯る批評家は馬琴の他の山の
石ともならうとて、あらうか、馬琴を張合あらせたの相違

○自分の長い間書畫に親んで見た、古かく自分の親んだ世界に限られたものと、古畫などは全く世界のものであつた。真贋の定め難いものは自から鑑定の協会といふ、或い人に相談したこともあるが、大概は自分の直覺で決し、疑はしいものは婚ハすることもあるが、疑が常であつた。疑はしいものを強て及第させても、疑が常に纏綿して繁持がよくない。自分は勿論他人を家とし、自悟んでゐる。人と相談を重ねても自分の手がけぬと自信のあることを云ふことはない。決して利欲と正偽を云ふことはない。但し山陽は正偽と限り居り人の求めに応じても甚だ重宝することもあるが、実は己むを得ないからであつて、自信のあるものは無かつた

榛原製

書かない。自分の長い経験で可成やり換へることもある。敢てやり換へないこともあるが、難しいことは出来ない。ツクツク鑑定の困もすんで陶り溺ひあるのは来歴にうつり信を置くことである。或い若者に成り或い際間を見て偽来が出たと思はれ、其の物の出所が縁故があつたりすると先角見が先入主となつて誤ることがある。書畫の来歴を重んずべきだが、決して過信するさせない。若い書や添翰がいくらでもしてくるが、中味が面白くないことが往々ある。いくら主流な家筋に偽はつたものでもいつしか入り換へられることもある。から来歴を信ずる者、根性の悪い者、且つ考へ不氣と云ふ人は

完大の筆るいも悲する不かがあつもき美が問題を生
する本となる。正面は一目直覚ぜてこるが時るは疑
かいしいものもあつも正るもつこう偽るもつこうこいものが
ある。それは数字判すべきこのものが多い。二三のも壁こうみ
て諦視すれば判断のつくことが多い。注意を要すること
といい随長者の多い人の低品、大つ戸を強つた人の低
者でもある。比数るは最も弱低が多いこのまもとくに
りがよく便かるいからである。すると隠直者。多い低品
いよく換えてみる大つ戸を強つた人例へは文鼎など
まるると整理る優んだつ人も多く出つて、代低のび問
る父のもることがあるから油断は出来ない。右巻は
一たるその家庭ある祖、まれらん印く名巻の印が

榛原製

捺してあつても代低と云いのるこのがある。印は斯る体な
るの真厚を定める標後とかこのこの。飾りの印は拘流
することも問題を抱くこともあるが、古かし印も厚
心しかこるの直ちる印で真厚いこのこの、どうこの深か
者画の刻芸も美を乱るやうな出来しあるを、印の特
撲を出ることが常でいつも馬脚をあらはす。大抵
の模印は木で低らしから、印の心得がなんがこれだけ
こる深でもあるが、飾り印と言を留めるこの人が多いのは
何かる不完でありこのか、人一代るは書画共いろく変
遷があつても全く別人の書いたやうなものがいくつもある。
例へは青木翠は云くは芸草や古い別や秋成やなどは
五ちりかこれである、秋成の晩年の書をこれこと加る

が元の姿を立派にあるのを嫌うために後世職人の書いた南畝
を誰でも必ずもあるように、ちょうど
ひとりの。その人々の手跡の美(美)を知るに僅かばかり
見れまを付け花をするとあんひもるへ盤定市)しが起る。又
人の筆跡のいろいろの戯れを器一杯りするから、一下面
り別邸を知つた丈でも利一立ぬることがある。絶
定家の筆跡の如き誤を無すまるものがある。紙の質な
ども時代くる異つてあるから、こんも考へ合わせるべき
唐書に古い唐紙を獲たので、これを清浦の家と
書いたことがある。唐書にしろ人に古から、今の紙の種類
も及ばるものが何ある年も住れら、或の白流以前の人の作
品と紙の上から判する程定家から古いる云くらいの又あ

る時代の反射から溶つたさと西洋の剥り肉厚ひ剥い
び二枚とるすることが出来るの動もすると一枚ひ二枚ある
ことも多るがいとん著の共と西しいと云ふのあいるいが皆
紙から生まることとなるあつたと鎌定家の印を捺いらること
びある。書画と新も往々の偽造があつても動もすると元
る迷はされる。特公抵抗の頃る鏡書ひあるとが書家と
思はるるがいやと云見識ひ鏡や幅は自から決し九相真
せず、娘が書を自著しいのひ、皆を代筆と云はん
とある。サアこんな偽造が出るとも抵抗のものは皆代筆と
と行のハろんが中まん抵抗ひるけんべるんと思はまるあ
がいくらもあるから、一枚とこんな偽造のみを捨へるべきひ
るべ。書と新も同様ひある。偽筆は必ずよく似せも

あつても筆力が鈍つてゐる傍らの筆の運びは臨する
から力がぬけて、鑑定家の眼をごまかすことは出来ない。原書
をまねた似せた度合はよくとも筆に誤りがあるし、叢山偽
筆の手紙などはウソ字のあるのは偽物もあるし。権勢家
の所義帖は偽筆を作ると称する。義者が鑑定眼の
ないのは自分極めて極めて鑑定させて考めるあり、未鑑
定家が鑑定をたいへんな臨んで真意を云ハるいちもく
原因するのであるから。蔵家は奇の義する大画賊二帖と
連絡して書いた山陽の書帖ちゃんと原心があるが
子爵が之をもつて陳列の考めの時の偽りを行くと自身の此
帖は自動車に載せて持て来た陳列されたものが倒てあつた
偽筆と鑑しても折角下寧を持て来らるこの陳

榛原製

列から者くつけたものを今主の大いの弱いる。心者
の血統を絶りつて寄宅を結ぶ髭匣を托することが
書も行のんをあるが、こんも注意を要することは無義の人文
すしも鑑定眼の所有者ひのうい。京都の類似の鑑定に陥る
失敗いちろうが、原時の頼玄徳は書も文書も拓南
こ者く絶があるこうこ、北人の鑑定はアテるこうこめと拓本
まん北、自分の(高野伊助)いつも山陽の帖を手に入れると、玄徳
寄宅を結び髭匣を頼むことが例であるが、芸人を東
京く持つて来て示さんとのを元ると六七帖の書くこう偽
筆もあつた。無縁の家まの兎角鑑定者がある、甲の家の
是拓するのと乙の家で所を拓の碑と鑑のもの注意を拓べきもの
とするやうなことがあるから也

の体へレオン、ボオル、フアルグの一家言中今の作を物語す

× 紙上に一ぱいとりでに滴り落ちて来るような処けを書きしるすべきこと、鏡乳石を探つくしていけない

× 即ち一流一派の、内在する豊富な滋味の結晶ともいふべきもの、食べごろになる時の嘴から滴り落る工キスをあらわすべきもの

× 音楽のいい、身の整ひの整つた、氣働きのある選ばれた言葉一つ一つが生させる、美と門口で暫く引留めて置け、いよく準備が出来上つ

榛原製

たと思ひ、かつ、いかなる皆の分の用達しを生じやすい

× 古典からの引用のしかたと、若々しい君の感人の前に、墓の中から掘り出した君の祖母さんを連れて来るようなものだから

× 過渡のようなものへ、君は自分の切整を失ひあるものいい表の細胞といかつらん沸騰させる結果になる。

× 読書の旅のように、ゑん苔の酸漬で、君は自分の味覚を鈍らせる処けだ。ゑん苔の夢幻の来の中し、君の自分の大きの針を失ふの仙境の山

× 作品はあんまり大きい（長）きそれはいけない。美が分裂

不視眼のうちに高貴さん、精神がそこの集中され得ることが必要だ、レンズの絞りと巧みなるべイマアジエ工はいとくはつ生る

× 後者は花の戸口だけ開けてやり給へ、隠れ面白を探すのは読者の仕事だ

× 普通の快な文章と呼んでいるもの、才一線の整頓だけしか持たない文章だ、その背後にはもしない。こんちゃ防ぎきんるい

× 一読的快な文章の手を入れない女のやうなものだ、まず花を満足させるが、二度目は早速立つばる感じがする

× 下手な詩人が感興だけを書く

× まゝしい思索家を尊敬すると改さう。光りてるうゝ思索家ゝ書く収穫をひいあり

× 月ゝ知の新しさは、保温器を用ひてるけれど育ゝ知ゝ。新しさ役立ゝ

× 新ゝ風別のつく年齢ゝ迄も如何て育つ迄かつく、ゝ時ゝ新しくゝ

× 芸術の人生に於ける、精液の血液に於けると同じ

× 智慧(ヒテリジヤンス)は完成を期す、ゝから智慧が働き出したら、その環を全ふまむ止らうとしゝ、智慧ゝ為生ゝ

○鑑定家はいつの世でもあるが、物の真贋を定める大切な役割である。勿論各種のまがえやすくあるべきが書画は勿論のこと茶器刀剣でも鑑定家がある。概して或る物を指摘して直しけんがおのづから、其真贋の解がつく。出来るのは必ず勿論相当の知識が無ければ判別の出来ないものもある。日本人は直覚が強いので、物の判別は鋭利の目を有してゐるので何かを一見すると其の利害、例へば刀剣などは何百本でも其の鋒を撫でて進んだ心かを判ずる事が出来る。茶の湯の茶杓のやうなものが今でもいくらもあるが、其のものでも一見直ちに利鈍の低が誰の低と判定する敢て誤ることはない。

榛原製

がある。その特徴をよく知つてゐるからである。其の直覚が必ずしも鋭利であるからである。鑑定家は必ずしも物の製作家ではない。全く書画をみつから書けないものが印を書画の鑑定をしても失鑑誤鑑の無いのは、業者の癖や特徴がハツキリ其目に映ずるからである。書や画をやることが鑑定を誤ることの切つて多い訳は、其の低が表てに出んば自然敬服を拂つて真贋と判ずることがあるが、それは必ずしも當てにならない。低から鑑定眼は一種特別のものである。鑑定のむつかしいのは古墨跡、殊に比較すべき類品のないものを判別することである。其の紙質や墨色や書体や書風などを

依つていつぱの人の書と云ふことは別のようなれども美が何人であるかとハッキリ判し難いことがある。美をば是非誰の作と判定云ハねばならぬことがあるのハ「古業」と名くる一ツの職業が出来たからである。「業」と「術」と喝くしその極れが真贋を決することゝなるのハ、実ハ百年害毒を流す業であることがあつた。昔しの極れが今ハ甚しく失鋭と例かられてゐる。必竟今ハ比較研究の材料が容易に得らるゝからの事だ。兎角職業とゝなると弊が生ずる。職業だけの鑑定家ことに公平でない、逆利代の真贋鑑定ハ術策や巧術策ならぬハ其地位等見識から、多く逆為をなすことゝなるから本当の鑑定家と推さるべきは古業ならぬ初期了作(江戸西

榛原製

河の人平清盛のごとき)などこれを目利ひあつたびもあるが、豊臣秀吉が古業の称を許したのも此人の為にしたことが最も大の面白い統が続くと逆を墜落した。初めハ書の鑑定に限られたのが逆を古書画に及ぼしたから、一層あやしくなつてアテにならぬようなことがあつても何もかも鑑定した。いくら鑑定眼が高尚を鑑定し杉村景文が其他の土佐寺真珠庵の宗旨が流の鑑定をし大徳寺ハ狩野圭が狩野の出書を鑑定したなどハ狩野圭が狩野流鑑定ばかりなるようなことが出来ぬ。今日と云ハねば鑑定家の権威を持ふことゝなる。得意の力のある者を鑑定をしたりさんとするハ去とよくなるハこと

とが

○散葉中、椿山手写八芳牧を得ル得タル、椿山の
印記もあり、巻末蓋書して
　　寛政癸酉春上澣写於孫華堂南窓下
　　椿山題者平御
とあり、八芳牧の楊井庵貴集所載のまこと
良山牧八芳えん多一ニ云く金蛾二ニ云く玉蟬三ニ云
く兎耳四ニ云風尾、五ニ云素蟾、六ニ云沼中那
七ニ云葉莉八ニ云く金笑こんゑ
此の写本ハ栗本冊洲の八芳を考証したるあ
ると、各場ニ本冊の考証あり、楊井庵の八種
初めて用を為す、冊洲の跋ニ云く
右楊井庵集中所載ニ八芳也或人コレ

榛原製

カ雖定ヲ余シ洲ハ、其中二三ノ不詳モノ
ヤリ顧フト其前載当時開ク所ノ八種ヲ
假ニ私名ヲ設称スルモノナラン、金蛾玉蟬
ノ如キ、古人ノ名目ニミラレ、只其形狀ヨリテ
随意ニ命名スルヿ、多ク例アルコトナリ、兎
ト長氏帚耳、ハ、風尾ノ如キ芳香ナキモノ
ヨリ、後人強テ拘泥スベカラズ
冊洲ノ此跋刻本ニ収メラレタルカ未ダ捜スヘシ、是ア
ラバ或ハ雑誌本冊ニ載録シテ専門家ニ問フモ
可ラン、此ノ中川徳基ハ椿山ノ手写ト
係ルカ故ニ強テ記ス

印材の話（承前）

楠瀬日年

尙ほ以上に擧げた諸石以外福建の甫田石、天臺山の寶花石、陝西の煤精石、雲南の綠松石、直隸の房山石、豐潤石、湖廣地方から出る湖廣石等があるが、これ等は質が軟きに失するものかさもなくば脆いものか、硬きに過ぐるものかで、印材として使用に堪へぬもの、刻印の上に不便なもの等である。

かうした中に現在尙ほ限りなく產出し、且つ其文質色澤共に優れたものは福建省の閩侯縣から產出する壽山石の外にはない。現今使用消費されて居る九分通りの石材はこの壽山石である。この壽山石は文質色澤共に多種多樣で決して一樣でない。從つて他の諸石よりも文獻が多い。又今日まで私が手がけた印材の九分通りは壽山石でゝもあるだけに自分としては話も多い。

壽山石を產出するところは福建省の都府福州の北門を出て北すること我が十里許りの道程にある。尙ほ詳しく云ふなれば福建省閩侯縣東北の芙蓉、芙峰の二山の對峙する凸地にある壽山及び月溪の二鄕から產出するのである。福州からの僅か十里許りのこの山道は言語に絕した難路で、道とは名ばかり、雨が降れば谷となり、天氣のよい日はその水の涸れた谷の川床を道として辿るので、川床には大小の石がごろ〳〵して居て歩き辛いことは話の外である。從つて採掘された石材を福州の市場まで運搬することは可成りの困難な仕事で、人夫が僅か負へるだけを肩にして杖を便りに運び出す、運び出された石は福州で加工されてそれから國々に送り出さるゝことゝなつて居る。

他の諸山の諸石は殆ど採掘され盡して居る今日、尙ほ盛に採掘を續けられて居るこの壽山石が一體何時の頃から世に出たかと云ふことに就いてはどうも判然としたことが分明して居ない。傳說はいろ〳〵語つて居るが支那一流の傳說だけにどれも信をおくに足らぬ。其中一番古い話は宋の時にある。其當時官命に據つて獻上品として壽山石が採掘されて居た、土民等は年々この勞苦に堪へ

ないで大石で坑口を塞いでもう出ぬと云ふことゝした。其の爲めに世に現れずに終つたのだと云ふのである。

一番名高い話では、ある僧(明の頃)が壽山の一艸庵に駐錫して居た時、閑に任かせて拾ひ集めた石を自から磨いて念珠を作つた。ある日其の念珠を首にかけて福州の町へ出たところ、これを見た市人等は皆其の美はしい色澤に驚きの目を見張つた、これが卽ち壽山から產出するところの田石であつたと云ふのである。その驚いた人の中に徐と云ふ總督があつた。其の總督は好事家であつたが、直ちに土民一般に向つて田石の採取を禁じ、一方手兵千人を派して搜探せしめ殆と採取し盡し、其のために田石は全く見ることが稀れになつたと云ふのである。

骨董集說には康熙七年に閩縣の陳越山が採集した石を携へて北京に出たところ、王侯貴人が先を爭うて夫れを購ふのに價を論じなかつた、それより壽山の名が遍く天下に傳へらるゝに至り、其後大官が閩中に宦する每に誰れも彼れも此地に採取を試みるが常となり、そのため乾隆の初め頃には最う佳石は殆ど採取し盡された程になつたと見えて居る。

以上は壽山石に絡む傳說のおもなるものであるが、謝在抗や毛奇齡の言葉を參酌するとどうも明末から淸初にかけて盛んに採掘したものらしい。

前にも云つたやうに壽山には多くの種類があつて、印材中最高の良材もあれば又それが坑を同じくするもので あらうかと怪しましむる程の粗材もあり、これを色澤の上から見ても恐らく數十を數へても尙ほ盡せないだらうと思はれる程ある。卞二濟の壽山石記にはその美はしさを傳へて——間々玉珀に類するもの、玻璨玳瑁硃砂瑪瑙にまがふもの、犀や象牙に類するものがあつて同じものがない。五色の中に深淺があつて其の姿を異にして居る。紺なるもの、絲なるもの、綺なるもの、縹なるもの、葱なるもの、艾なるもの、黝なるもの、黛なるものがあつて、或は蜜の如く、醬の如く、鞠塵の如く、鷹褐の如く、蝶粉の如く、魚鱗の如く、鷓鴣斑の如きものがあると云つて居り、更に言葉をかへて峰巒波浪穀膩理隆々隱々千態萬狀彷彿すべきもの、或は雪中の疊嶂の如く、或は雨後の遙岡の如く、或は月澹無聲湘江一色、或は風强くして勢を助くる楊子層濤の如く、或は葡萄初めて熟し霜前に顆々たるが如く、或は舊葉まさに肥え日下に幡々たる如く、或は吳羅鬷彩、或は蜀錦譽文、或は又米芾の淡描雲烟一抹の如く、或は徐熙の墨筆丹粉兼ね施す如く云々

と云つて居る。如何にも工に美はしい言葉ではあるが、實際壽山其物は其文質色澤共に美はしいことも美はしいのである。

かく幾十種の壽山石もこれを坑の上から見ると山坑、水坑、田坑の三つにしか分け得ない。ある說では水坑と云ふのは水晶洞から出る石を云うたもので山坑の一つであると云ふが、自分の聞くところでは水中から採取したものを云ふと云ふにある。事實現在でも溪流中から採拾するものもある。尙ほ後章に揭けた梁津釆の調書中にもそれと覺しきものがある。(詳しくは表に據つて見られたい。)

其處で山坑と云ふものは如何なるものかと云ふと、山から掘出するもので、多く岩石を採掘して來てこれを打碎いて出すものである。往年鑿と槌とによつて坑內の岩石をかぎ取つたものであるが近年は火藥を用ひて爆破して居る。

田坑と云ふのは田や畑の中から拾ひ出さるゝもので、その石は山坑と違つて原石が直ちに良材である。これを一般田石と呼んで居るが、この種の石に皮つきや自然石の多いのはこの故である。近年矢張り產出はして居るが只恨むらくは小さい石しかなく、寸に餘るものは昔も今も得難い。この田坑は山坑や水坑と違つて種類が三種しかない。印材中最高のものとされて居る田黃と、白田と呼ぶ白色のものと、烏田と呼ぶ黑色のものとである。

山坑には可成り多くの種類があり、幾つかある坑によつて各々其の特質を有し、各個に名稱が附せられて居るが、民國五年(西曆一九一六)農商部駐閩鑛務技術員梁津釆の發表した調書には四十種を擧げて居る。尙ほこの外にもあるが大體この調書は今日まで發表された壽山石の種目中先づ詳細なものと見て過りがない。それを次に摘錄する。

名稱	色	琢磨面	產狀	產地
田黃凍	純黃	半透明有光澤	水田底沙層上	壽山鄉一帶
魚腦凍	淡青白	半透明如玉微有光澤	在山麓巖石中成脈狀	牛角山
天藍凍	淡天藍色	微透明	同前	水晶洞內
艾綠凍	艾綠色	半透明微有光澤	溪邊巖石內成脈狀	月尾溪邊

凍油石	淡灰	半透明如凍油蠟	同前	成都坑地方
黃色成都坑	褐黃內有小輝紅	半透明有光澤	巖內成脈狀	同前
縞狀成都坑	雜色黃紅白藍相間	半透明如蠟潤嫩者佳	土內	大高山地方
白壽山	紅白	半透明光澤微如蠟	巖內成脈狀	同前
壽山紅	紅色中有硃砂點	同前	同前	同前
白高山凍	微綠白	半透明內有黑白點	同前	同前
微白高山凍	微花白色	微透明	土內成脈狀	壽山北十里柳坪鄉
多色高山凍	雜色	同前	產溪泥中	成都坑下部
鹿目格一名鴿眼砂	紅地有藍白點	半透明有光澤	巖內成脈狀	九茶山
牛蛋黃	藤黃色	不透明	同前	杜成坑下部
奇絳紅	嫩紅	同前	同前	
柳塞紫	紫色	微透明	同前	
月尾紫	紫或暗紫	微透明或不透明	同前	
檳榔九茶巖一名豹皮凍	灰白地有黑斑點	半透明	溪邊土內	
岱下黃	黃褐	同前	巖內成脈狀	水晶洞內
連紅黃	藤黃色	微透明	同前	同前
溪板獨石	暗黃成微褐	半透明	同前	同前
坑頭凍一名瓤紅	肉紅色	同前	同前	同前
烏地高山凍	灰白內有黑白輝斑	微透明	同前	同前
高山黃	赭黃	同前	同前	同前
微黃高山凍	淡黃或微帶黃	半透明	同前	同前

紅高山凍	白地有紅褐輝紅	微透明	同前	同前	
瑪瑙紅	紅色内有粉紅輝斑	同前	同前	同前	九茶巖後山
豆青綠	豆綠色	同前	同前	同前	
溪中凍	淡黃及暗黃	半透明	溪底		
吊耿一名豆耿	深蒼藍色	同透明	巖内成脈狀		吊耿地方
虎皮凍	黃褐有灰白及黑色條文	不透明	同前		
牛角凍	黑色	不透明有光澤如牛角質	同前		
虎嘴老嶺石	雜色	微透明	同前		
黃縞老嶺石	黃地黃紋	同前	同前		
紅縞老嶺石	紅色有雜色縞紋	同前	同前		
芙蓉青	淡青或嫩青	半透明潤如玉有光澤	同前		
白芙蓉	淡白	微透明	同前		
芙蓉黃	淡黃或帶紅	同前	同前		
半山蛋黃	暗黃	半透明	同前		
溪蛋黃	黃色	同前	同前	溪石中	月洋溪流中

觀石錄や後觀石錄などに擧げられて居りながら、該表に洩れて居るものもあるが、該表は梁津釆が壽山地方に於いて獲得したもののみに據つたもので、溯つて昔時採取されたものにまで及んで居ないからである。同時に諸書に傳へて居る產坑と相違したものもある。それは同一の品が時を異にして他の坑から出たに據るものと考へるより外にないと思ふ。尙ほ梁津釆の調書は簡に過ぎて鑑賞するものゝ側から云はしむれば滿足が出來ぬ。今尠しくこゝに補足して見ようと思ふ。

田黃。　前記調書の第一にあげられて居る田黃は、田石中でも印材總體の上からする最も上位を占むるもので其の價は黃金の幾十倍もするものすらある。一體田石には三種あつて、黃色の外に白色の田白と黑色の烏田とあるが、この田白も烏田も共に得難いものであり、それに比し割合に得易い田黃の方が價としては貴ばれて居る。普通熟柿のやうな黃色さが佳い。毛奇齡の言葉では甘黃、蜜蠟、羊脂と云つても皆田黃田白の二種の中である。田黃には山坑、水坑、田坑の三種があるが一番いゝものは田坑である。次は水坑で、山坑は第三位のものである。尤も田坑は濕潤で朧に透きとほつて居て其の色は恰度蒸した粟のやうであり、水坑は濕潤で明かな光澤はもつて居るが其の深さに於いて田坑に及ばない。山坑は其質が前二者に比していくらか堅い、さうして往々にして膚裏に細かい沙をかんで居る。これが一番の缺點であると云つて居るが、この山坑の田黃と云ふのは高山黃を混同したものではあるまいかと思ふ。水坑中に田黃があると云ふのは矢張りこれは田坑と見るべきで土坭の中から溪流中に流出したものを適々得てかく云つたものと想像する。何故と云ふに、田石と云ふ名は田坑であるが故で、いくら色澤がそれに似て居ても山坑は石質が違ふ。何と云つても田坑でなければ田黃としての濕潤がない。

田白。　羊脂玉のやうな白さをもつた微透明の石である。高兆雲の言葉をかりて云ふなれば卽ちその皈潔さは梁園の雪のやうであり、その溫柔さは飛燕の膚のやうで人をして心蕩せしむるものがある。

芙蓉。　芙蓉には幾種となくある。梁津釆の芙蓉青、白芙蓉、芙蓉黃も皆それで、壽山から我が里程にして三里許り隔つた月洋と云ふ村から產出したものである。それが乾隆年間に岩磐が壞落して坑をふさいだので再掘は出來なくなつて居り、舊出土のものばかりである。表には紅芙蓉を缺いで居るがこの紅芙蓉の上品なものに至りては其品位色澤が鷄血石などの比でない。この芙蓉石中で多いのは白、次に黃。青や紅は共に稀である。壽山石中田黃に次ぐもので人によると少し軟かいと云ふが自分はその軟かいことを芙蓉の缺點とは思はない、寧ろ長所として喜ぶものである。刀をあてゝ見ると少しも苦を立てない。まるで蠟か何かを切つてゐるやうに心持が快い。鐫理がないので刀をやるのに思ふ存分なことが出來るが、大體に細密な印を作るのに最も適して居る。例へば趙之謙の好んで作つた細鐫線文の如きものである。

魚腦凍。　壽山石中に魚腦凍と呼ぶものが一二三種あるが、其の中でも牛角山から出るものを最上位とする。この魚腦凍は青田石中の魚腦凍と違ひ思ひなしか軟かいやうである。一見其の魚腦凍に似て居るのを以つて世間で

魚腦凍と呼ぶものゝそれは水晶洞から出る水晶凍、高山から出る高山凍と云つて別に名が附せられて居る。この本當の魚腦凍と呼ぶ牛角山から出るものは半透明な青味を帶びた白色の中に小波のやうな少さい白い斑紋がある。只一樣に青白色であつたり、又その中に綿のやうな浮斑があつたりするのは後二者のそのいづれかであり、高兆雲の謂ふところの白きは濯々たる冰雪人の心腑に澄徹するものは卽ち水晶凍である。殊に環狀の白い斑紋のあるものは環凍と云ひ水晶凍の一種である。尙ほこの外に、

天藍凍。　と云つて朧ろに透きとほつた淡い藍色のものがある、高兆雲の所謂青を出る藍の如く蔚々として光あるもので、普通世にいふところの水晶凍は白色のものや黃色のものや肉脂凍と呼ぶ肉紅色のものもあるがこれはごく稀れである。たゞうらむらくはこの凍石は壽山石中でも軟かい部に屬することである。

一體支那は無論我が國でも石本來の名があるにも拘らず通りのよい名を冠する癖がある。この水晶凍の如きもよし水晶凍中一番多い種類の白色のものではあるが、それに魚腦凍と云ふ名を冒瀆させて居る。これには私は石になり替つて不服が云ひたい。概して水晶凍は魚腦凍の又白田とか白蠟とかと云ふ名によつて好事家の手に移つて行く場合が多い。これには巖內成脈狀のものと土中から原石のまゝで出て來るものとがあつて、成脈狀のものを白高山凍と別に稱して居る。

壽山紅。　白壽山と同じ大高山から產出する石であるが、これは紅い中に更に紅い硃砂斑のあるもので、その硃砂斑の部分が他の部分よりも少しく軟かい、つまり一石の中に硬軟の度が違つてゐる。これがこの石としての弱點である。俗に更紗と呼んで居るが現在我が國で尤も多く見掛けるものである。

紅高山。　白い中に紅褐色の斑のあるもので、壽山紅よりはいくらか硬いが少しくかり〳〵するやうな感じがある。どうかすると薄く剝けるやうに缺けたりすることがある。併しこれ等は壽山紅、紅高山中の下品であつて、上品のものになると壽山石中の首座を占むるべき優秀なものもこの中にある。卽ち桃花紅と呼ぶもの、血紅と呼ぶもの、石榴紅と呼ぶもの、瓜瓤紅と呼ぶもの、晚霞紅と呼ぶものなどそれである。桃花紅には透明したものと透明せぬものとあつて、透明せぬものゝ方が珍らしい。血紅と云ふのは一ト口に言へば高山凍の鷄血である。色は昌化石の鷄血程には冴えないが秀麗な點に於いては寧

次に置かるべきものではあるが、その水晶凍の逸品となると其の色澤の美はしさは、本物の魚腦凍以上のものがあり、其の味ひ、其の厚み、其の潤ひは又別箇のものがあつて決して魚腦凍におとるものでない。狡い商人の爲めに贋物扱ひさるゝことは石自身も心慨であらうが、自分も不服である。

艾綠凍。　これは一名艾葉綠とも云ひ、謝在抗は青田石中の艾葉綠を以つて第一位として居る。けれども後年に至つて卞二濟は昔は艾葉綠はよかつたらうが今日ではまだ〳〵外によいものがあると云つて居る。それは畢竟各人の嗜好の上からで、艾葉綠中にもいろ〳〵種類があつて一種でない。最上品になると綠色が如何にも深くつて潤ひがあつて品がいゝ。が、壽山から產出する艾綠凍は青田の艾綠には及ばないらしい。現に福州の人達に云はしむると四五番品としか云はない。それは福州の壽山から產出するものがよくない證左と見るべきだと私は考へて居る。これを產出する月尾溪と云ふのは壽山から少し離れたところである。

白壽山。　これは大高山から產出するもので、この上品は水晶凍と識別することが出來かぬる程のものである。これが白壽山として賣らるゝ場合よりも水晶凍とか或はろ血紅の方が優つて居る。晚霞紅と云ふのは一名美人紅とも云ひ、乳白色の半透明の中に紅粉を蒔き散らしたやうな石で如何にも美はしい石である。

高山黃。　これは大高山產出の黃色のものを云ふ。該石は少し硬く且つ鰇理のあるのが何よりの缺點である。この透明なものを黃高山凍と呼ぶ。この上品なものを田黃だと云つて賣る奸商もあるが、この凍石と田黃との差異は黃色の中に赭黃の斑が黃高山にはあるから直ぐ見分けがつく。

刀をあてがふと無論違ふ、この石は硬く粗な爲めにガリ〳〵云ふ。

吊耿。　深蒼藍色のものを吊耿と云ひ、黃褐色中に灰白色及び黑色の縞のあるものを虎皮凍と云ひ、灰色中に黑色の縞があつたり、黑色のみのものなどを牛角凍と呼んでゐる。

月尾紫。　成都坑中の下部のもので、他に黃色成都、縞地成都等がある。この月尾紫を俗に艾綠と稱して賣買して居る人がある。一體艾綠は昔から名高い丈けにこの外に廣東から產出する石で廣東綠と呼ぶものがあるが、これを艾綠と呼んで賣つたりもする。故に艾綠と聞けば餘程注意をして鑑識せぬといけない。自分はよく人から謝

在抗と下二濟との意見の相違をたゞさるゝことがあるが、それは謝在抗の見た壽山石の範圍と、下二濟の見た壽山石の範圍と、其の範圍の相違と各人の嗜好と、所有或は所見の同品でも優劣の相違とに據るもので、謝下二氏の所說の黑白は斷じ難いと答へるを常として居る。全く同坑產出の同名の品でも驚く程の優劣のあることは自分は今日まで屢々遭遇して來て居るし、又よく「これが稀品だ珍品だ」と云ふものゝ相違も同樣、稀珍の品は其時代々々の出土の多寡に據つて違つてくるものであるからこれ等の言葉を絕對のものとはすることが出來ない。

連江黃　往時連江から出た故にこの名があるが、現今產出する岱下黃を連江黃と呼んで居る。この岱下黃は杜、成坑下部から出るもので決して上品のものとは云へぬ。其缺點として第一に擧げねばならぬのは罅理のあることで、新材の時は氣附かなかつた罅理が手澤愛玩して居る中に出て來て失望さすやうなことが間々ある。

溪蛋黃　芙蓉を產出する月洋地方の溪流中から見出さるゝ黃色の石である。この石は外面が黃色で中が白色である。割つてみると染めた石のやうな氣がする。この爲めに大抵自然石のまゝのものが多い。質は芙蓉と同一で壽山石中でも上品に屬すべきものである。印材商の間には久しい間水中にあつて浸潤した結果かく外面が變色したものだとして居る。

牛蛋黃　溪蛋黃に似た石で矢張り溪流中から產出する獨立した石塊である。

老嶺　梁津釆の表には三種を擧げて居るが其外貌から尙ほ幾種の名を附けて居る人もある。けれどもそれは唯外見——色澤——つまり石の柄合ひから名付けたもので石質には變りがない。壽山石中の駄石である。併しこの駄石が中々馬鹿にならない。と云ふのは壽山石中で一番特徵のある硬さと一種妙な脆さを有つて居る爲めに、その石質をよく理解して刀をやると奇功を奏する。其處でこの石を殊に愛し好んで刀を奏する人が現時の支那人に多い。わけても先年物故した近代の巨臂と云はるゝ吳昌碩などの自刻印を見ると、大抵この老嶺である。老嶺の中でも淡青色の微透明のもので、一見我が國で見る芋羊羹のやうな石は罅理もなく、刀の味が十分に出てくれてよい。朴老遒勁を旨とする浙派の刻風や、尠くとも吳昌碩風の印を刻する人にはこの石が撰ばれる。殊に急就章などにはもつてこいの石である。一體多くの人は其の石質がどうあらうとおかまいなしに刻りたい刻風——印派を試みやうとして失敗して居る者が多い。印材中の最

上品質のものなるが故にどんな刻風にでも適するものと考へるのは大變な誤謬である。其石質によつて刻法を考へねば到底成功は出來ない。であるが故に刀を奏する以前に於いて適不適を考へることは印材の良不良を問ふ以前にせねばならぬことで、この刻印への第一歩が死活の岐れ目となるのである。從つて好事家が篆刻家に印材を出して索刻する場合、どんな風の印を賴みたいと豫め素人考の深入りした希望條件を附することは不可であると云ふことにもなる。

新高山　孚老山　この二石は表には缺けて居るが、壽山石中の駄石でありながら省略することの出來ない石である。現今尤も多く產出し、我が國にも輸入さる壽山石はこの二石が量の上に於いて一番である。刻印するものに好まれないのは第一其質が軟生であり、罅理が多い。從つて刀を奏するのに意のまゝにならないことである。

尙ほ此外にも擧げ得る印石の名はあるが、其質が粗惡で刻印に堪へないもの、又は質の善惡は別として珍稀に過ぐるもの等であるが故に省略することゝする。

一體以上擧げた諸石は其坑から運び出されて行く先きは前にも云つたやうに福州の都會である。福州には印材を專門に商ふ店が可成り多くあつて、此地で加工されるのである。卽ち琢磨され印鈕が刻されるのであるが、この印鈕を刻する多くは十二三位から刻り始めて其一生を刻り覺えた獅子とか、虎とか龍とかを刻つて過すのである。長い年月の間にはかうした傭工中からも名工として傳へられて居るものも二三はある。康熙以後には張鶴千、楊玉璇、潘子和、謝寅あり、其後に至つて周尙均、徐渶、馬文、鑒司、桂海、和尙などあり、現時林文珠、林文寶、林鏡瀾などの名が聞えて居る。併し共に六十を越した人達で新人が出るまでは今日では昔日のやうに精妙なものは見ることが出來なくなつた。

印材を手入し保存する上に油を塗つて置くとよいと云ふ。其處で油を塗るよりも油の中に浸して置けば尙ほ早くよくなるだらうと想像される。さうして油の中に浸して居る人もあるが、それはとんだ誤りで、油の中に浸して置いたからと云つて早く油が浸潤するものでない。又印材によつては油を多く要するものと油を要しないものとがあつて一樣でない。例へば鷄血石の如きは全然油を付けては不可ない。油が浸潤して來ると鷄血の鮮美な紅

色が黯黒になる。一體この鷄血の黯黒に變色したものに二樣あつて、油の浸潤に據るものと長く光線に觸れた爲めに變色したものとであるが、後者は光線の遮斷された場所に置けば順次もとの鮮美を取り戻すが、油の浸潤によつた變色は取戻しが殆ど出來ない。又白芙蓉の如き純白を以つて貴ばるゝものにも鷄血同樣油を必要としない。もしこの芙蓉に油が浸潤すると雪をかためたやうな純淸な白色が淀んだやうな鈍い濁つた黯色のまゝに半透明な石となつて了ふ。もうかうなると一生その石はもとの純白な色とはならない。立派な白芙蓉も最う白芙蓉とは云へなくなる。かうしたものは白芙蓉許りでなく凡そこの種の色澤を有つたものは殆ど凡てゞ例へば水晶凍なども同樣である。其他普通の諸石は大體に於いて油を必要とするが、油を輕く塗つて置く、只ださうして置くと云ふばかりでなく常に出してはよく掌で撫でることである。この手澤の一方が印材に對しては一番の糧である。もし新材にして仕上げのよくないものは最初木賊で研き、次に藁の袴で磨き、最後に漆章と稱する瓦の細末を油で煉り固めたものに油を付けて磨くのである。我が國ではよく椋の葉などを使ふやうに云ふが、椋よりは水蠟樹の方がいくらかよからうが、現時支那では大抵漆章のみを使用して居る。

附記

福建工業學校で發表された壽山石の分析表があるので餘白に附記することゝする。

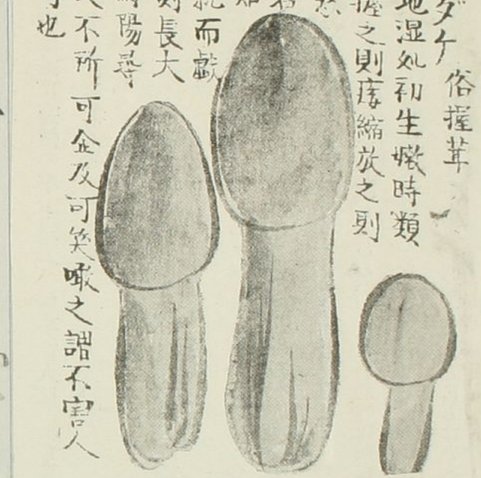
質	量率 以百分計
揮發物	一、二〇〇
鋁二養三	四九、九四七
鉄二養三	一、二〇九
亞兒加里	一、四二五
鈣養二	四二、七〇九
鈣養	二、二〇九
鎂養	一、一〇九
雜質	〇、一九二
以上	

榛原製

○明治天皇ハ赤穂の復讐事件を御感悦遊ばされ、
明治の初め東行幸の時品川を御通過の時、勅使を
泉岳寺に御差遣ありて大石等を優遇せらる勅旨が
あつたことを此度初めて知ると得た。尋後も各地御
巡幸のことがあると、別る京に赤穂義士に関係の
材料のないか、あるか差出せとの勅命があつて、行
在所と差出したものゝ中へ。陛下は宮内省
に真贋あるを御ぐさせられ而して宮さしも
て豆かせられたが常であつた。御唐紙中一枚
人の日誌にあると云ふが、おそれえらい太い沿革で
赤穂に関する材料は多く集つて居るといふ、
大石等家系も興味すべきもの

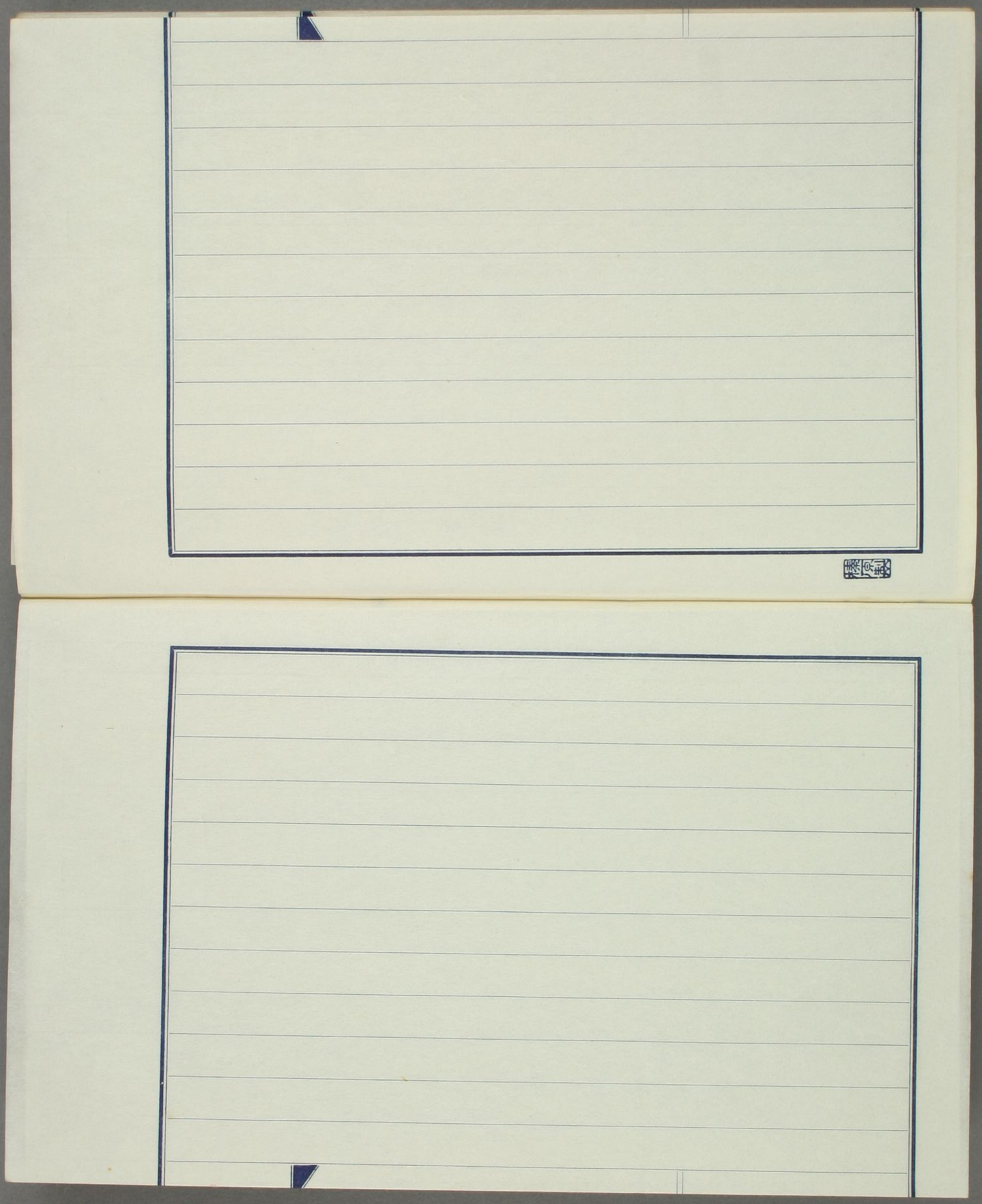
○明治教育中書簡を通つて千社札五十枚を得た
少さな書簡、長さの如き大きさで、無紙に極さまくの
裸人形が書かれ、皆美麗な彩色が施され、上部に
色紙形の中に地名と人名が二人つゝ刻されてゐる。ど
こで貼つたものか色々紙もあるが、いつ貼つたものも
ないが、お札博士スタールの紀念の為め千社札
が貼つたものと似寄りの所為である。勿論沿革のあ
る板者。千社連中が社中の中会で題を
選み、図を美しく考へるやうなことがあると見へる。
スタールの紀念に貼つたのは東海道五十三次を
図改めてゐるもの、図を中一会せし一例で
ある此の裸人形の絵は一枚二人の名があるから百人分で

○於信州北佐久郡ニ出テ来ル、こんの一名カウカサタケ
と云ふもの、学名を *Lepiota procera* と云フ菌類
科ニ属シ形状の高
山地ニある菌にこん
ハ握んが如く縮し放
ての強力があつて膨
れる、その男陽ニ似た
ものとて淫婦ハ
就て重宝とする
とも伝し北の菌
の陽物のごとく大きくなるもの、その長大のものなると、牡馬
婦人これを玩ぶ能ハずと、全

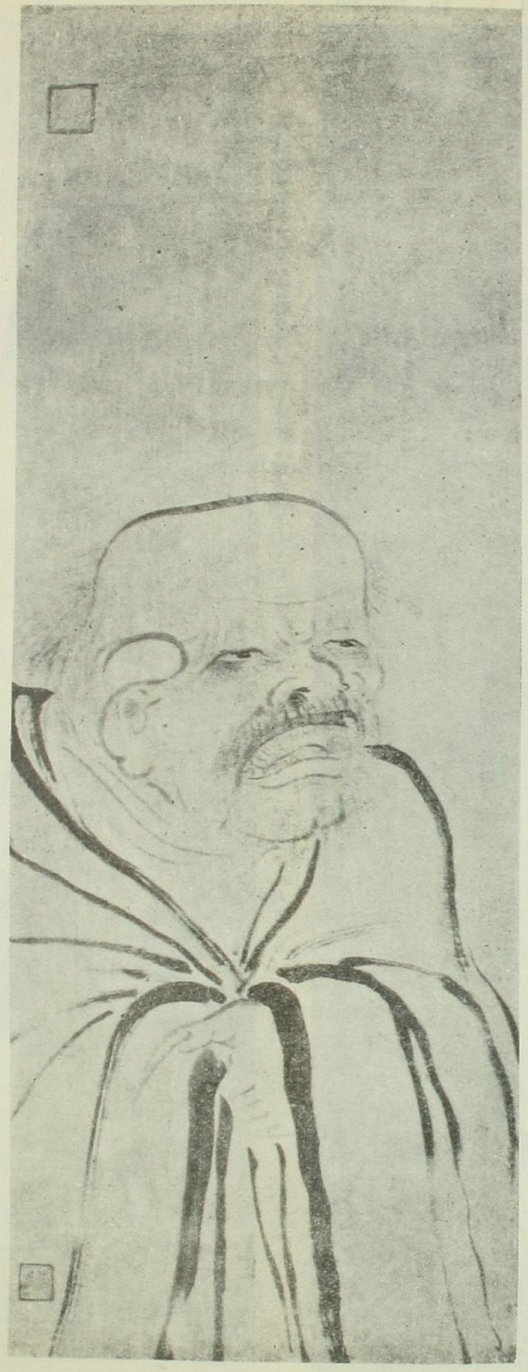


「三野伊那菌圖」ニ載ル「にぎりたけ」

用とするも無害なるとなり



牧溪筆　老子（一名鼻毛老子）



立二尺九寸五分　巾一尺一寸

此圖は東山御物にして、駿河御分物の内にある有名なもの、記錄に曰く、南龍公探幽を以て拜見被仰候一處、ケ樣の類は天下一幅の品、東山殿の印有之旨申候、」我邦にて古來老子を描くもの、之を範とするもの多し。

閲覧室

榛原製